

---

# 最強の剣士 ~紅の都を創る者~

勝利 g

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最強の剣士～紅の都を創る者～

### 【Zコード】

N4763V

### 【作者名】

勝利go

### 【あらすじ】

「最強になるついでに…世界を救ってくれないか？」

一度は夢を絶たれた主人公が異世界へ飛び、世界を救いながら最強を目指す、というお話です。基本、主人公は最強ですが、主人公よりも強い生物？もいます。主人公が最強になつて世界を救う様を一緒に見ていただければ光栄です。

## プロローグ 1（前書き）

誤字、脱字がありましたらご指摘お願いします。

## プロローグ 1

「ぐつ……あああああああ……」

俺は右腕を掴みながら叫び声をあげる。俺の全身からは汗が噴き出していて黒い道着がびっしょりになってしまっていた。十五歳ながら、同じ中学の友人からは整っていると言われる顔も今は痛みで歪んでいるだろう。今にも乗せられている台から落ちてしまいそうだ。

そんな俺を見かねたのか、俺の側にいた白衣の男、おそらくは医者だろう、そいつが二、三人の看護師に指示を出す。

「鎮静剤早く！ 急いで！」

医者の良く通る声で指示を出された看護師たちが慌ただしく動く。俺が今いるのは県有数の大学病院だ。救急車で運ばれてきたのを覚えている。

その時、ズキン！ と右腕の肘の痛みがますます大きくなつた。

「あつ……ぐつ……！」

今、俺の右腕、肘にあたる部分が大きく腫れ上がっているのだ。肘から発生する痛みは電気信号となつて俺の神経系を駆け上り、脳に身体の異常を伝え続けている。

「先生！ 用意できました」

看護師の声が聞こえた。痛みに耐えながらチラリと声のした方向を見ると、看護師が医者に注射器を渡しているところだつた。円筒形

の形をしたそれは無針高圧注射器という押し付けるだけで注射できるものだろう。医者は右手に注射器を持って、俺の首筋の血管を探ると銀色に光るそれを押し付ける。

「ちょっとチクリとしますよー」

妙に間延びした声とともに「ブシュー！」という音がなり、俺は右腕の痛みがだんだん和らいでいくのを感じた。麻酔の効果もあったのだろうか、だんだん瞼が重くなつていく。

俺は眠気に襲われながら、右腕にあてていた左手を自らの額に当てる。

（なんで…こんなことになつたんだっけ…？）

俺はついさつき自分の身に起つたことを思い出そうと、己の記憶の海に沈んでいった。

二時間前

。

俺、ふじみや こうと藤宮紅都は祖父の家である剣術道場で、目の前にいる二人が防具をつけ終わるのを待っていた。

実戦剣術を基本とする藤宮流剣術の次期当主である俺は、祖父の言いつけでいつものように素手で防具もつけずに三人を相手にする稽古を行おうとしていた。

目の前にいる三人、村田、上代、服部の後ろにはこの前に行われた全日本剣道大会中学生部門の俺の優勝の証である黄金のトロフィーが輝いていた。

そちらに目をやっている間に、三人は防具をつけ終わったよつだ。左手に竹刀を持って立ち上がる。

防具で全身を固めた三人に対し、俺は黒の道着のみだ。

「それじゃ……始めましょうか」

稽古開始の合図を出すと、三人は俺に向かつて竹刀を正眼に構え、俺は重心を低くし両腕の力を抜いてだらりとたらす。別にやる気がないわけではない。三人相手に竹刀も防具もつけさせずに戦わせる祖父に不満は抱くが、多人数が相手の場合、相手が動いてから迎え撃つ、後の先をとるために動きに柔軟性を持たせる必要があるので力を抜いている。

力を抜きながら、めんどくさいな……と考えていると村田と上代がすり足で俺の後ろまで移動していた。

二人が動きを止めると俺は、正面の服部、右後方の村田、左後方の上代と、三人に囲まれる形になった。いい大人が三人で中学生に打ち掛かろうとするなんて……と口の中で呟いた次の瞬間、

「メエエエン！……！」

村田が動きを見せた。素早い動きで俺に打ち掛かつてくる。気勢とともに俺に竹刀を打ち下ろしてきた。体重ののつたいい斬撃だ。スピードもなかなかで悪くはない。

素人ならば、いや、経験者であつても防ぐのは難しいだろう。だが、俺は右足を支点にして左足で床をけつて反時計回りに90度旋回、半身になることで高速で迫る竹刀を難なく回避。

目の前を竹刀が通り過ぎる。俺は竹刀を奪うために村田の手に左の手刀を喰らわせた。

「ぐつ……！」

バシン！ と村田の手に手刀がヒット。村田の口からうつめき声が漏れる。もちろん防具の上からのただの手刀では

ダメージが与えられるわけがない。俺が使ったのは古武術の技の一種『鎧通し』の応用技、藤宮流『幻刀』だ。

名前の由来は手刀からのダメージが刀で受けたものと大差なかつたため、幻の刀という意味で名づけられたそうだ。

本来なら奥義と呼ばれてもおかしくない技なのだが、祖父の地獄の特訓のおかげである程度は使いこなせるようになつていた。相当痛いだろうな…と考えながらも力が抜けそうになつて、村田の手に容赦なく右手で幻刀を叩き込み左手で村田の手から竹刀を抜き取る。村田が打ち込んでから5秒程で一連の動作を終えると、俺は一度、後方へ飛びすさつた。

両足で三メートルほど後ろに着地、奪つた竹刀を正眼に構え残りの二人へと向き直つた。

ひるんだのだろうか、服部がジリッ…と後ずさりする。俺はそれを見た瞬間、猛然と床を蹴つて服部へと小手面を喰らわせる。パパアン!!という音が響き服部が大きくのけぞる。俺は面を打つた反動を利用し竹刀を大上段に構え、全身の力を込めて服部の面を打つた。

「ハア…！」

ドパアン!!! と凄まじい音が俺の鼓膜を震わせる。服部は足をよろめかせるとその場に座り込む。

それを一瞬だけ見ると、前へ進む勢いを利用して180度反転。

「おつと…！」

振り向いた瞬間、眼前に竹刀が迫つてきていた。少し慌てながら右腕に力を込め、

「ふつ！」

俺の正面やや左に向かつて打ち込まれた竹刀の右側面に高速の切り払い。上代には俺の右手が動くのを見ることはできなかつたのだろう。面越しに見えた上代の顔には驚きの表情が見て取れた。その隙に俺は体を右にひねり、

「セイツー！」

上代ののどに強烈な突きを叩き込んだ。捻転力を最大に乗せた俺の突きを受けて上代が吹き飛んでいく。

「グゲエエツー！」

（…なんだろ？、この変な声は？ 空耳か？ 空耳だな）

と、上代の断末魔を空耳扱いしておいてから、竹刀を村田へと放つておく。

首をこきつ…と左右に曲げ、軽く体操をしてから、体をほぐすためのランニングへと向かつた。

## プロローグ 1（後書き）

初めまして！勝利goです！

ちなみに今年高校受験なので更新が不定期になるかもしれません。  
この作品を

読んでいただけた方にお礼と謝罪をへへ

書き直しました

捻転力を最大に使つた？捻転力を最大に乗せた

誤字、脱字は指摘していただければうれしいでつす！

## プロローグ 2（前書き）

誤字脱字がありましたら、ご指摘お願いします！

## プロローグ 2

タツタツタツ、と俺は火照った体を冷やすために田舎の道を走り抜けて行く。一月も半ばにさしかかるつか、とこいつにひるなので、ひんやりとした空気が肌に心地よい。

しばらくアスファルトで舗装された道路を走っていると、

「ん…？」

何かが聞こえた気がして、俺は足を止めた。しばらく耳をそばだててみるが何も聞こえてこない。

空耳か？ と再び走り出そうとするが、

「ひやあ…！」

猫の鳴き声が聞こえ、俺はやつを聞こえた音も猫の声だったのだろうと納得してから鳴き声の聞こえた方向に首を向ける。

すると道路のそばの草むらから俺を見つめてくる黒猫の姿を見つけることができた。

可愛いなーと俺が黒猫をじつ…と見ていると、黒猫がトトト…と近づいてこようとした。

その時、

ブロロロローーと、軽トラックがかなりのスピードで走つて來た。前方にいる黒猫に気付いていないのだろうか、スピードを全く落とさずに直進して來ている。

「間に合え！」

このままでは黒猫は軽トラックに撥ねられるだら、俺はそう考ふ黒猫を助けるために地面を蹴つた。

十メートルほどの距離を一秒ほどで駆け抜け、体勢を低くすると黒

猫を捕獲。近くの草むらに放り投げる。だが、黒猫を救った直後、ドゴン！ と、俺の全身を衝撃が襲つた。撥ねられたのか、そう自覚した時には俺の体はすでに宙に浮いていたが、すぐに頭を抱えて体を縮こまらせ落ちたときの衝撃に備える。

その一秒後、俺は地面に落ちた。だが、

ボグツ…と体の部位の一部が地面にぶつかり、嫌な音を立てる。

その音の発生源は、

俺の右肘だった。

事故の翌日

「『右腕肘関節部複雑骨折』…君は剣道をやつているんだったね？ 酷なことを言つようだが…剣道はもうできないと思った方がいい。日常生活にも支障が出るかもしれないレベルの怪我なんだ。勒帯も損傷してる」

目の前にいる医者、俺の手術を担当した医者で名前は牛田といつらしい。牛田が無表情に俺に現実を突きつけて来た。

俺はその言葉を聞いて、思わず立ち上がり、ガタン！ とイスを倒してしまつ。だがそれに構わず、ポツリ…と声を発した。

「…本当なんですか？ …なんで…なんで…！」

咳いていくうちに自分で声がどんどん大きくなつていいくのがわかつた。俺は頭に血がのぼり、感情を抑えられなくなつてしまつた。

「俺は！　一度とー！　剣が握れないってのか！？！」

ドスン！　と俺はギプスのはめた右腕を無理やり動かし壁に叩き付けた。すると、神経がズキズキとした痛みを脳に伝えてきた。その痛みの大きさから、俺にも自分の右腕が使いものにならなくなつていたことがわかる。

そんな俺を牛田は哀れむような目で見てくる。じばしの沈黙のあと、

「そうだ…。君は一度と剣道はできない」

と牛田は言い切った。

俺の頬に何か熱いものが伝つて落ちていった。牛田が気をきかせたのか、俺の個室から出て行つた。

バタンとドアの閉まる音がきっかけとなつたのか、俺の目から涙が溢れてシーツにいくつものシミを作つた。

## プロローグ 2（後書き）

ちょっと悲しい感じです…

文章下手だなー俺（泣）

俺、藤宮 紅都はなじみの弁当屋『あじのひらき』に立ち寄つていた。

少し古いが家庭的な感じもある場所、その小さな弁当屋で日々の夕食を買うのが、この前に高校一年となつた俺の毎日の日課となつてゐる。弁当を買つたためにここへ立ち寄るのが午後六時半ぐらいなので、『あじのひらき』の店主であるおじさんとその奥さんが作り立てを用意して待つてくれている。

ちなみに、俺はこの店であじの開きを見たことがないのだ。なぜ店名になつてゐるのだらうといつ疑問がここへ立ち寄る度にいつも頭をよぎる。

「はいよー、藤宮弁当ね、500円だよー。」

そんなことを考へてゐる内におじさんが弁当をピーチール袋に入れて俺に差し出してきていた。

差し出された弁当の名前は、『藤宮弁当』である。藤宮弁当とは俺が事故の後に一人暮らしを始め、ここに弁当を買つよつになつて三ヶ月ほどたつたある日、おじさんに、好きなおかずやアレルギーなどを詳しく聞かれ、戸惑いながらもその全てに返答すると、その翌日から『日替わり藤宮弁当』がメニューに並び売りに出された。

そして、それから一年が経つた今でも、俺は藤宮弁当を食べ続けているのだ。

俺はいつも通り、制服である黒のスラックスに手を突っ込んで小銭を取り出し、代金を手渡す。

「いつもどーも」

「まごどーー」

礼を言つてビニール袋を受け取る。

俺はおじさんの元気な声を背に受けながら、見慣れた大通りを歩き始めた。

(腹減ったなあ…、わざと家に帰つて飯食おつ)

そう思い、歩くスピードを上げる。その時、

「おつと…」

「うわつ…」

曲がり角を曲がろうとした時、俺は小学生くらいの子供とぶつかつてしまつた。

子供はぶつかつたはずみで尻餅を突いてしまつ。

「大丈夫か?」

声をかけて助け起こうとした時、子供の背にあるものを見つけて俺の動きが止まる。

あるも、それは、竹刀と防具を入れた袋だった。

俺の脳裏に一つの場面が映し出される。

「剣を握れないお前なんてクズだ…！」

祖父の口から俺に向けて、冷たい言葉が投げかけられた。周囲にいる門下生たちもゴミを見るような視線を俺に向けてくる。

周りの人間が向けてくる…視線…視線…視線…視線…視線…視線

線視線視線視線視線視線視線視線視線視線視線視線視線視線

? ? 視線 ? ? ? ? ? ?

「お兄さん？ 大丈夫？」

小学生が心配そうに俺に声をかけてくる。その声でハツと現実へと意識が切り替わった。

（まだトラウマが残つてんのかよ…）

心中で呟く。俺が一人暮らしをすることになった原因。いや、事故のせいでやめざるを得なかつた剣道。剣道だけが取り柄だつた俺が、他の奴らからひどいイジメを受けるのにそうはからなかつた。

そのせいで剣道関係のものを見ると、軽いめまいのようなものに襲われてしまつのだ。

俺が、ふう…とため息をつく。

そんな俺を小学生はじつ…と見つめて大きく頷いた。

「それで、突然なんだけど…、お兄さんつて『藤宮 紅都』さんだよね？」

「？ そうだが、なんで俺の名前を…？」

見ず知らずの子供にいきなり自分の名前を言われ、俺は小学生に疑惑の視線を向ける。だが小学生は満面の笑みを浮かべるとんでもないことを俺に言つてきた。

「良かつたー！ じゃ、ちょっと神様に会つてきてくださいー！」

「はあ！？」

「えいっ！」

子供が俺に何かボールのようなものを放つてくる。そのボールに俺

が触れた瞬間、

パアアアアア！と俺の周囲が輝いて…

俺は意識を失った。

## 2 神様とい」対面？（前書き）

誤字脱字がありましたら「」指摘お願いします

## 2 神様との対面？

まぶた越しに光を感じ、俺は目を開いた。

俺が横になつてるのは青々とした野原、そして俺の視線の先には青空が視界いっぱいに広がつていた。

「目が覚めたら、そこは見知らぬ天井だつた。てわけじゃないよな…、空だし」

俺はボソッとつぶやいてから起き上がり、大きく伸びをして体をほぐす。そして自分の体に異常がないか確認しようとして、あることに気づいた。

「なんだこれ！？」

俺の服装は腰に一枚、布が巻かれているのみでほとんど全裸に近い状態だつた。しかも胸の中心には丸い宝石のようなものがはまつている。

宝石？の大きさは直径10センチほどで、不思議な赤色の光を放つていた。

俺は五秒ほどその宝石を観察してから、とりあえず人差し指で突ついてみる。

「痛つ…！」

球体の表面に触れた途端に、俺の指先に電流が流れたかのような痛みが走つた。

いつてー、と手をふんぶんと振つて痛みを和らげていると、

「それには触らないほうがいい

中性的な声が俺の背中に投げかけられた。

「！？」

グルン！ と勢い良く振り向く。するとそこには、昔のギリシャ人が着ていたような白い衣をまとった壯年の男性がいた。こちらを見ながら、口には微かな笑みを浮かべている。

身長は175センチの俺より少し低い、170センチといつといふか。

なんだこいつ…と眉をひそめながら男性に質問してみる。

「…あー、あなたは…何ですか？」

あ…間違えた「何」じゃなくて「誰」と聞こいつとしたの…と心の中で後悔した次の瞬間、

「クツ…ハハハハハハッ！！ 面白いな君は…『誰』ではなく『何』と来たか…！」

いきなり爆笑された。俺が自分の中でも後悔した後だつたため、少々癪に障るものもある。はあ…とため息をついて、再度、男性に質問する。

「わかった、訂正する。アンタは誰だ？ そしてここはどこなんだ？」

俺は笑われたことに少し腹を立て、敬語を使わなくなつた。だが、それを気にする様子もなく男性はひとしきり笑つた後、呼吸を荒く

しながら俺の質問に答えた。

「『』は天界…、神、つまり私が存在する場所だ」

「何を…言つている?」

「分からぬいか? 私を詳しく説明するのであれば、この君の住んでる世界『アース』を創り、管理している者、神だ」

「……紙?」

「神だよ、少年。名は『イエス』でも『ゼウス』でも好きなように呼ぶといい」

男性、いや、イエスは心底ビリでも良さそうに自分の名前を告げた。俺はいぶかしげにイエスを見る。

「それで…? イエス…と呼ばせてもらひうが、イエスさん、なんで俺はここにいる?」

俺の質問を聞いたイエスは何度かぱちぱちと瞬きをした後、ああ…と両手を打ち合わせた。パン! という音が響く。

「大事なことを忘れるところだつた…! 君は藤宮紅都くんだな?」「…そうだが、なんで俺のことを知つてゐる! ? なんで俺はここにいる? 質問に答えてもらいたいな…!」

質問に答えようとしないイエスに俺は、一年ぶりに殺氣を解放、イエスにぶつけてみた。

ゾンッ! と重苦しい殺氣が野原を覆つていく。

だが、イエスは殺氣を軽く受け流し、俺の胸の宝石に触れた。バチバチバチッ!! イエスの指と宝石が触れ合つた瞬間、宝石が激しくスパークする。

「おつと…なかなかの魂の強さだ。私の目に狂いはなかつたな」

手を引っ込めながらイエスが独白する。

「…どういふことだ？」

「つむ？ 魂の宝玉の大きさはその人間の魂によつて決まるのだよ。常人なら一センチあればよいほつなのだが」

「…意味がわからない、魂？」

イエスは俺の言葉を受け、俺の胸の宝石を指差す。

「それが魂だ。君のな…。そしてそれが君を呼んだ理由でもある」

「理由…？」

「そうだ、君をここへ呼んだを説明しよう」

イエスは俺の周りをぐるぐると回り始める。俺はその動きを首だけを動かして追つていく。

「世界はいくつも存在している。まずはそれを理解してもらおう。君が生き、私が管理する世界『アース』もその一つだ。それでだ、つい最近、この世界と比較的近い次元に存在する世界『アーバニア』の神、まあ一人いるのだが、そのうちの一人から頼まれたのだ。『このままではアーバニアは滅びてしまう！ 助けてくれ！』とな」

イエスは一度口を開じ空を見上げた。

「それで…なんだ？」

俺は話の先が気になつてしまふがなかつたのでイエスに声をかけて急かした。

「私たち神は直接、世界に干渉することが出来ないのだ。そこで君

の出番だ。アースで一番適正の高い人間を探してみて適任を探した。アーバニアがこちらで言つ中世のようなものなので、剣を使える、ということもポイントだったがな。アーバニアを救うには世界最強くらいにはならないといけないらしいので、最強を夢見たことがあり、その素質がある、その線からも探してみた

「それで？」

「藤宮くん……」

「なんだよ……？」

「最強になるついでに……世界を救つてくれないか？」

「……………はあ？」

突然のアホ発言に俺はフリーズしてしまつた。

「？ 世界を救つてくれという単純な話なのだが

「……………はあ？」

「アーバニアは剣と魔法の栄えた世界なのだ。ある程度、思考に柔軟性がなければならない、そこでアースで一番適正のある人間を探したら君が出てきた」

「……………はあ？」

「頼みを聞いてもらえないか？ もちろんただでとは言わない。君の願いを何でも一つ叶えよう。…ふむ、肘を怪我してこるようだな？ なら願いの他にその肘を治して「本当か！？」

しまつた……と俺は思つも、もつ時はすでに遅しだ。今までずっと変な顔でジト目でイエスの話を聞いていたのに「肘を治す」という言葉に反応してしまつた。

そんな俺の態度をチャンスと見たのかイエスが畳み掛けてくる。

「ああ、仮にも神だからな、人間一人の怪我を治すくらいは出来る。君はずつと苦しんでいたのではないか？ 事故により肘を壊し剣道を続けられなくなつたことを」

どうやってかは知らないが、イエスは俺の心情を的確に言いつててく。

「…………」

俺は唇をかみ締めた。

（そんなうまい話があるわけがない！ 命を失うリスクだってあるだろうし……）

逡巡する俺を見て、イエスは笑みを浮かべる。

「少し、君の心と記憶を覗かせてもらつたよ……。君は最強を目指していたが、怪我でその夢は絶たれた。…もう一度、己を高めたいとは思わないのか？ それで納得できないのなら…君にはブランクがある。それを埋めるために世界を救うというのはどうだろう。本当の実線経験などそうそう得られるものではない。アーバニア最強の剣士になれば、平和なアースの最強など、簡単に超えられるだろう」

イエスの言葉が、俺の心に絡み付いてくる。イエスは俺に手を差し伸べて、

「さあ、世界を救え！ それで君は最強になれる！」

無茶言つてゐよな…と俺は笑いながら呟いて、イエスの手を握つた。

（もういいや、多少のリスクなんて関係ねえ！　一度は諦めかけた夢を、また掴むことの出来るチャンスなんだ！　断るなんてありえないだろ…！）

「わかった、お前が俺の肘を治してくれるなら…その世界、俺が救つてやるっ…！！！」

## 2 神様といつて？（後書き）

こんにちはー！

なんか主人公がアホっぽいかも？と思つてもそこはスルーしておいてください^\_^

今は自分の力不足を痛感しているところなのですww

あ、あとエピローグは最後の方だと教えていただいたので  
エピローグ？プロローグ  
となっています^\_^  
キヤー恥つずかしー！！！

ではでは、また今度ノシ

### 3 異世界に出発！（前書き）

誤字脱字がありましたら、指摘お願いします

「わかった、お前が俺の肘を治してくれるなら…その世界、俺が救つてやるつーーー！」

イエスの右手を握りながら、俺はまっすぐに奴の目を見据えて宣言してやつた。

もちろん、肘が治してもらえるから、という理由だけで頷いたわけではない。

最強になつて世界を救う、その言葉に惹かれたのだ。

小さいころから最強に憧れていた俺だが、全中制覇などのスポーツとしての剣道の最強では我慢が出来なかつた。

真剣を持ち、祖父と斬り結んだこともあるが、あの時のスリルは今でも忘れられない。

祖父との五時間にも及ぶ死闘の末、最終的に両者の全力を込めた斬撃がぶつかり合い、刀が耐え切れずに折れてしまつたのでお開きとなつてしまつたが。

世界最強になる、地球では中世にあたる世界でのそれは、確実に俺を成長させる戦いのはずだ。

そこで得られる経験値は、俺の生きている世界である『アース』とは比べ物にはならないだろう。今までのブランクなど補つて余りある。

世界を救つたあとには願いを一つ叶えてくれるというのも魅力的だつた。何を願うかは、まだ決めてはいないが。

俺がそんなことを考へていると、イエスは辺りを見回しながら俺に声をかけてきた。

「さて、それでは藤富くん。アーバニアに向かう前に何か君に伝えておくべきことがある、場所を変えようか

「場所を変える？ それはいいんだけど、どこに行くんだ？」

俺の視界には見渡す限りの大空と、その下に広がる草原しかない。俺は、至極まつとうな疑問をイエスにぶつけてみた。

「ビニへ行く……だと？ ああ……文字通り『場所』を変えるのだよ

イエスはさう言つてから、俺の田の前に右手を差し出すと、パチン！ と指を鳴らす。すると、

「なつ……？」

世界が一瞬だけ光に包まれ、俺がまぶしさに田を瞑つてから再び開くと、そこにはさつきまでの景色は消え失せ、白昼の宮殿が広がっていた。

俺は驚愕の声を上げ、そんな俺を見てイエスは面白そうに笑つていた。

「どうかな？ 色、私のために建てられた神殿を元にしてみたのだが……

「それで？ 伝えたいことってなんだよ？」

「それで？ 伝えたいことってなんだよ？」

田畠が二重のイエス、元に笑つて、手をひらひらと振る。

「むう…、この神殿になんの感慨も湧かぬか…。まあいい、これをやうやく」

パチン！ といエスがもう一度指を鳴らすと虚空から光とともに動きやすそうな、ゆつたりとした長袖のシャツと袴に似た感じのズボンが現れた、色は両方とも漆黒。

イエスはそれを俺に投げ渡してくれる。

「おうと、下着と靴も必要だつたな？」

黒い靴とトランクスのようなものも放つてきた。

俺はそれをキャッチするとイエスをじつと見つめる。

「なんだよ…これ？」

「その格好のまま異世界に放り出すわけにも行かないだろ？ 早く着たまえ」

俺は、ありがたく衣服を着させてもらつことにした。腰布を外してから下着、ズボン、シャツ、靴の順に身に纏つっていく。

俺が服を着終わると、イエスの手には一振りの刀が握られていた。

「武器はこれでいいか？」

イエスは刀を俺に差し出してくる。黒漆塗りの鞘に包まれたそれを受け取り、俺は刀を抜き放ち刀身を外気にさらす。

シャラアアアアン！ と、澄んだ音が宮殿に響き渡った。

「……すげえ…！」

刀の刀身にはうつすらと波紋が浮かび、刀身の優美さは俺が今まで

見た中でも最高のものだつた。それでいて肉厚の刃が、それが観賞用ではないことを物語つている。

「気に入つたか？ 貢、趣味で作ったものだが……これもいるだらう？」

俺は渡された黒皮のベルトを腰につけ、刀をそこに吊るす。

「餞別だ、……神からの贈り物だぞ？ それと最後に……！」

イエスが俺の右肘を掴んだ。痛みはないが妙な違和感を感じる。

「おい何をす」「『治れ』」「

イエスの言葉とともにイエスの手から光が生まれ、その光が俺の体を包み込んだ。

「これでいいだろう！ ……しまつた」

「『…しまつた』って何！？」

俺は狼狽してイエスに詰め寄つた。うむ……とイエスは頷く。

「肘の怪我は治つたはずだが……、実は君の体をアーバニアの光人といつ種族のものに作り変えたのだが……、私の力の一部も君に渡してしまつたのだ」

「といつと？」

「向こうの世界ではスキルといつものがあるのだが……、君の体は作り変えた。『わが身を証明しろ』と唱えてみるがいい」

うん？ わかつた、と俺は頷き。

「『わが身を証明しろ』…これでい ！？」

俺の言葉は光とともに田の前に現れた一枚のカードによつて中断される。

大きさは、厚さ2ミリ、横幅5センチ、縦幅10センチといったところだらうか。

発光が止まると、板は重力に従い落下し始める。

「！ ととつ！」

慌ててカードをキャッチする。手に取つてからカードを眺めてみると、そこにはこう書かれていた。

フジミヤ コウト

所有スキル 『神速神武』

称号 無し

「なあ…なにこれ？」

「…長くなるがかまわぬいか？」

一時間後

イエスの話をまとめるとこのよつた内容だつた。

アーバニアにすむ生物は、光人、獣人、神人、魔人の四種族と幻獣

と呼ばれる生き物。

俺は、光人という普通の人間のような種族に体が造り変わったが、イエスが間違えて自分の力をほんの少しだけ俺に譲渡してしまった。カード、スキルカードというらしいが、それに映し出されていたスキル名『神速神武』はそのせいで生まれた。

スキルとはスキル名の発声によつて発動するアクティブスキルと常時発動状態のパッシブスキルがあるのだが、『神速神武』は強力すぎるため、パッシブスキルでありながら発声によつて効果が発動するという激レアなものだということを教えられた。

「まあ、大体わかった…、俺に有害じゃないんならいいさ」

それより、と俺は右腕に力を込める。少しづつ力を入れていき、肘に痛みがないか確認する。

「よしつ…」

腕にどれだけ力を入れても肘に痛みが走ることはなかつた。刀を抜き放つて、俺は二、三度、素振りをしてみた。

右上段から左下段への袈裟切り、刀を跳ね上げ左上段から右下段への逆袈裟切り、そこから水平に横一文字の二連切りにつなげる。ヒュヒュヒュヒュン！ 俺の両腕が流れるように動いていく。刀を大上段に振りかぶつて、

「ハツ！」

ブォン！！ 空気が両断され風切り音が宮殿に響く。俺は事故以来、久しぶりに刀が体の一部になつたかのような感覚を感じた。

「イエス… ありがとな…」

「礼はいい…、それより、もうアーバニアに送るぞ？ 安心しろ、  
転移先にはお前の肩慣らしに丁度いい相手がいる場所を選んでおい  
た」

イエスが空中に光で何か図のよつなものを描き始める。その図は徐々に大きくなり、俺の周囲を覆い始める。

「それでは…世界を救つてきたまえ！」

俺の周囲を覆う図が高速で回転し始めた。

パアアアアアアアアアアア…！！！

と、光が輝きを増し、俺が目を開けていられなくなつた。

「ぬ…」

車酔いのような軽い酩酊感を覚え、うめき声を上げる。足元が存在しなくなり、俺の体は宙に浮いているよつな状態になつていて。天と地が何度もさかさまになつていてるよつだ。

それが、どのくらい続いたどうか、それは唐突に終わりを告げた。

どさつ…、

「ぐお…」

無重力のような感覚が終わりを告げ、俺は背中から落下した。  
いて…と咳きながら起き上がってみると、俺がいたのは洞窟のよ  
うなものの中だった。

暗いがほのかに明かりが見える。

「ど…だ…？ 洞窟みたいだが…」

辺りに視線をめぐらせるが俺の背中側と両側には壁があるだけ、

（前に進むしかなさそうだな…）

縦横2メートルほどの洞窟に沿つて歩いていると、前のほうに大きな空間があるのか、風が俺の頬をなでた。じつと見ていると炎の明かりも俺の目に映りこむ。

俺は少し、歩くスピードを上げていった。

かんかんと、足音が洞窟の壁に反響して俺の鼓膜を震わせる。

「…………」

狭い洞窟の壁から抜け出す。広い空間に出たな、そう思つた次の瞬間、

「グルウウウウウオオオオオオオッ…………！」

耳をつんざくよつた咆哮が辺り一帯に響き渡つた。

### 3 異世界に出発！（後書き）

咆哮の主は一体…！？

#### 4俺 VS ドラゴン-? (前書き)

更新がかなり遅れてしましましたすいません>>

誤字脱字がありましたらご指摘お願いします

#### 4 僕 VS ドラゴン！？

「グルウウウウウウオオオオオオオオツー…………！」

耳を劈くような咆哮が響いている。

その咆哮の主は、まさに「山」という表現がぴたりの巨体であった。

三十メートルほどの高さの体は黒い鱗で覆われ、頭部には赤く光る

眼、口元からは炎がけむけむと漏れ出している。これは、

「…………ドリゴンヘ。」

思わず、後ずれつてしまつ。幸いなのは俺に背を向けていたことだらうか。

「ゴクリ……と唾を飲み込む。俺の脳裏にイエスの言葉が浮かぶ・

君の肩慣らしにて一度いい相手がいる場所を。

「ゼットえ殺すツツツツ…………」

本当に叫んだら皿の前のドリゴンに殴りかれててしまうので、心の中だけでそう叫んでおく。

ギリッ……と奥歯を強くかみ締めていると、俺の視界の端で動くものがある。

「あん……？」

そちらに目をやると、10人ほどの人間が剣や槍、杖のようなものを持ってドラゴンに攻撃を仕掛けている。だが、半分くらいは怪我をしてしまっているようだ。

その中でも、唯一戦意を失っていないさうな姿があった。黒い長髪を持つ、おそらくは女であるうそいつは、ドラゴンの吐く炎を前転でよけ切りかかるうとする。だがドラゴンは右腕を振り回し彼女を薙ぎ払った。

「おいおこ…」

彼女の身に着けていたレザーアーマーが裂け、体が壁に叩きつけられる。

周囲にいた校を持てている奴らが、校を持ち上げ何事かを口にする  
すると彼女の周囲に合計で三枚の半透明な盾のようなものが形成さ  
れる。

吐いた。

エホホホッ！と猛る炎は廻にふつかりその勢いか弱まる。

「ノーマルモード」

ドラゴンが炎を吐いている隙を狙つたのか、全身をフルプレートアーマーで覆つた男が大剣を大きく振りかぶつて突進。大剣をドラゴンの足に叩きつけようとする。

「セアッ！！！」

鎧男は走る勢いそのままに大剣をドラゴンの右足に叩きつけた。しかし、ガイントローブはドラゴンの黒鱗に当たつた瞬間弾かれる。だが、鎧男の攻撃を受けてドラゴンは炎を吐くのを中断。丸太のよ

うな左腕を鎧男にぶつける。男はにぎやかな音を立てながら、その場に崩れ落ちた。

「はーっと、それを見ていた俺は、はっ…！ と我に返った。願わくばあの連中がドラゴンを倒してくれるかもしれない、と思つていたがどうやらそれは無理そうだ。」

「やっぱ…、俺が助けるしかないか…？」

「ここの人たちを助ければ、知り合いでないこの世界で生きていくのが楽になるだろう。だが、十人がかりで敵わないドラゴン相手にどう戦うか、俺はそこで一つのことに思い当たる。」

「イエスの言つてたあのスキル…。使ってみるか…？ 人間相手に試すのもどうかと思うし、効果を確かめる相手としては『丁度いい』か…」

深呼吸してから気持ちを落ち着かせ、刀を抜き放つて右腕だけで構える。

「よしつ…！」神速神武『…！』

俺がスキル名を発声した途端、一瞬だけ俺の体を光が包んだ。

「おお…！？」

右腕に感じていた刀の重みがほとんどゼロになつていて、俺の筋力が強化されたのだろうか。

一度、刀を鞘に納めてからドラゴンと戦つている連中に目を向けると、

「うん？あの女の子…まだ戦う気なのか？」

黒髪の女の子が仲間の制止を振り切って、また剣を持とうとしている。

その間にもドラゴンが彼女の仲間を叩き潰していく。

「やつべえな…！」

彼女たちの前まで40メートルほど、俺の脚なら6秒足らずでドラゴンと彼女たちの間に入り込めるだろう。足に力を込めて地面をける。

次の瞬間、

「いふつ！？」

俺の体は黒髪の女の子のそばの壁に激突、肺から空気が吐き出される。

「…は？」

黒髪の女の子と彼女のそばにいた、まだ意識の残っている人たちの声が見事にハモる。

うーん、とうめき声を上げつつ、状況を把握しようと頭を動かす。

「…ッ！一体何が…？あつ！頭からぶつかったよーな気がする…大丈夫か？」

俺は頭を押さえるが、そこで体の異変に気づく。

（ぶつかつた頭から血が流れてない…？ てか、一瞬でここまで移動するつて…）

頭を振つて意識を切り替えてドラゴンの方に視線を移しながら、まだ、あんぐりと口を開けている人たちに声をかけた。

「俺がここをやるから、弱い奴は少し下がつてくれないか？」「は？ あんた何言つて」

黒髪の女の子が何かを言つてくるがそれを気にしている暇はない。ドラゴンに向き直り、刀を抜いて構える。今度は、やり過ぎないよう二割ほどの力で地面を蹴つてドラゴンの体の真ん前に体を躍らせる。

動く俺でさえ鍛えた動体視力でやつと自分の動きを把握できるのだから、他の人間にはまるで転移したように見えるだろつ。

後ろから「ちよつ！ あんた…！？」という声が聞こえたが、そのままスルー。

ドラゴンの前に出てからジャンプ。10メートルほどの高さに到達すると刀を横一文字に薙ぐ。

「ラアッ！！」

「スパッ！ と刀身が黒鱗を切り裂いてドラゴンの腹に滑り込んでいく。豆腐を包丁で切つたかのような感覚に少し驚愕するが、落下中にも何度も切りつけておく。

「グオオオオオオ…！」

ドラゴンが腹部から血を流しながら、怒りの声を上げて炎を俺に吐いてきた。先ほど吐いていた炎の息とは違い、炎の塊であったそれ

を、俺は『斬り裂いた』。

斬ツ！！

と、両断された炎は俺の背後にぶつかって弾け、一輪の炎の花を咲かせる。

俺はまた地面を蹴つて今度はドラゴンの右足のそばに『現れる』。右手一本で刀を持つて、後ろに大きく振りかぶった。

「セイツ！」

多少、化け物じみた力に任せ、強引にドラゴンの足を切断した。ドシユツ…！ という鈍い音を立てながらドラゴンの足が斬り飛ばされ、その巨体がよろめく。ぼたぼた…、と血が地面に滴り落ち、吸い込まれていく。

「ガアアアアアア…！」  
「アヒルかお前は…！」

先ほどまではあんなにも強そうに見えた巨体が、今の俺にとつてはただのでかい的のように見える。

俺はドラゴンの怒りと痛みの混じつた叫びをアヒル扱いしておいてから、一度後ろに飛び退った。

「おつと…！」

後ろに下がるだけのつもりが、勢いがつきすぎて洞窟の壁にめり込みそうになってしまった。まあいやと壁に足で着地してから、全力でそこを蹴る。

ドゴン！ といつ音とともに壁が陥没、俺は弾丸のよじドラゴンの首元へと飛び出した。

スキル『神速神武』の効果かどうかはわからないが、反射神経がよ

うやーー」の体のトップスピードにも反応できるのみになってしまった。

俺は体がドラゴンの首に到達するのに合わせて刀を振る。

ズバン！－ と俺が刀を振るのに合わせて衝撃波が発生し、ドラゴンの首の幅1メートルほどが消し飛んだ。

俺が地面に着地すると同時に、ドラゴンの首がドサリと地面に落ちた。

ヒュヒュン！と 刀を振つて血払いをする。

その際にもボボッ！ と衝撃波が発生、ドラゴンの足に傷を作った。刀を振るたびに辺りに被害を撒き散らす自らの力に、俺はため息をついた。

「…………これ、どうやって止めたの？」

呟いた瞬間、体から光が滲み出し、薄れていいくにつれて俺の体からも力が抜けていくのがわかった。

「ぬ……？」

刀が妙に重く感じる。変な感じー、と思しながら、チン！ と俺は刀を鞘に収めた。

「…………あんま使つのやめよっコソ、 感覚鈍るわ……」

んんー！ と伸びをしていると背中に視線を感じたので振り向いてみる。

「あんた… 何者なの…？」

先ほどドリゴンに跳ね飛ばされてた黒髪の女の子が俺に警戒するよ

うな視線を向けてきていた。手にはショートソードが握られている。俺は敵意がないことを示すために両手を挙げた。

「何者って言われても困るんだけど…」

（どう説明したものか…、異世界入って言つて信じるか、いや俺なら信じないから信じないとthoughtしていたほつが無難だろつ。記憶喪失つてこにしておくか？）

「えつと…、とつあえず一つほど教えてほしいんだけど良い…？」

俺が質問をすると、黒髪の女の子は鎧男の方に近づいていった。

「…シグント、どうする？」

さつきドリゴンに跳ね飛ばされていた鎧男はやつとという感じで立ちながらヘルムをはずした。その下から現れた顔は渋いオッサンだつた。おば様たちに人気が出るような顔である。

シグントと呼ばれた鎧男は、俺に体を向けてから頭を下げてきた。

「シグントー？」

黒髪の女の子が目を大きく開く。しかしシグントは両手を挙げる」とでそれを制した。

「まずは礼を言わせていただきます。ありがとうございます、君のおかげで助かりました。しかし、それとこれは別。君が突然現れた不審人物であることには変わりはありません」

丁寧な口調でシグントが話しかけてくる。顔も渋いけど声まで渋い

な。

シグントの言葉に他のメンバーが俺を囲み始める。俺はそいつらに気を配りながらシグントに話しかけた。

「はじめまして、シグントさん？ 俺は藤宮 紅都って言います。あなたが不審人物って言うのもわからなくはないですよ」

少し、自虐的な笑みを浮かべながら俺は続けた。

「『わが身を証明しろ』、これでよければどうぞ？」

俺はスキルカードを取り出してシグントに差し出した。スキルや称号の部分は所有者がさらに許可しなくては他人には見られないらしいので、シグントに見せるのは名前の部分だけだ。シグントは俺からスキルカードを受け取るとちらりとそちらに目を向けた。

「…君が名前については嘘をついていないのはわかりました。質問を聞きましょ」

シグントはそういってスキルカードを俺に投げ渡してくる。

「…ここって…どこなんですかね？ それと、あなたたちは何でドラゴンと戦つっていたんですか？」

俺の質問に、シグントやほかのメンバーが目を丸くする。それにまわづ俺はシグントを見据え、質問の返答を待つた。

「…ど…ですか？ …」シジマードミス王國のガラム洞窟。私たちは最近ここに住み着いたブラックドラゴンを討伐するために結成されたパーティー『黒竜討伐隊』です。それで君のことも教えてもら

いたいのですが……」

黒竜討伐隊つて……まんまじやん……心の中で叫んでから俺は記憶喪失という設定にすることを決め、適当に話を合わせるために口をひらいた。

「マデミス王國……？ すみません、なぜか自分の名前しか思い出せないのです……」

俺が悲しそうな顔をすると、シグントが、そうだったのか……！ という顔でうるさい顔でいた。騙されやすいな……！

「すまない、悪いことを聞きましたね……。その詫びといつてはなんですが、先ほどの礼もかねて、マデミスの首都へと送りましょうか？」

シグントの申し出に俺がすぐさま頭にうつると、黒髪の女の子がシグントに詰め寄る。

「シグント！ 憄じすぎるわ！ こんな男をパーティーに入れるなんて……、私は断固反対よ！」

そんな黒髪の女の子にシグントが参ったな……という顔をして頭をかく。

「しかしですね……リア様、我々も疲弊しております……。先ほどのこの者の技量は見たでしょ。我々があそこまで苦戦したブラックドラゴンを簡単に倒したのです。戦力の拡大にはもってこいでじょ？」

「？」

おーい聞こえてるよーと言いたくなつたが、ここに置き去りにされるのはとても困る。

戦力扱いされるのはいい気分ではないが、何とか、リアと呼ばれた黒髪の女の子を説得しなくては。シグントの口ぶりを聞く限り、リアはなかなかに高い地位にいるようだ。様付けで呼ばれているからな。俺は恐る恐るリアに声をかける。

「あのー、リア…様？」

「何よつ…！」

ヤバイ…なんか知らんが相当嫌われてるみたいだ。さつき「弱い奴」て言ったのが悪かったのかな。うーん、こんな強気なお嬢様にはこんなのが効くんじゃないだろうか。

俺はリアのそばにまで歩み寄ると跪き、リアの手の甲にキスをした。

「なつ！」

「リア様…、貴女が私を嫌つてていることは良く解りました。ですが私は…貴女の側にいたいと…心から願つております。どうか短い間だけでも貴女の盾として…」

今まで読んだ本の中から台詞を抜粋し組み立てた。それだけを言って顔を上げ、俺はリアの手を取つたままその綺麗な瞳を見つめ続けた。

我ながらクサイこと言つたなーと心の中で嘆息する。だが、俺の視線の先で、リアの顔がボンッ！ と赤く染まっていく。

「え…とえとえとえとー……………わかつたわ…！王都までなら一緒に來てもいいわよ…」

良かったー！ うれしさのあまり、思わず歓声を上げそうになる俺  
だが、リアが、でも！ と続けたので動きを止める。

「…でも？」

「あんたのこどが氣になつてゐるわけじゃないんだからねつ……」

リアの宣言で、思わず俺は固まってしまう。

（…ねむ、まさかのシンチレですかリニア様…）

#### 4俺∨Sドリームー? (後書き)

塾やりやりで更新遅れました>>

その分今はいつもより長いのでそれで許してくださいー。

明日明後日も事情があつて更新できません…

それではまた今度^ ^

## 5 リア、せじゆのじゅうせたーじ（前書き）

更新が遅くなりました…

えっと、今日は三人称でリアがメインですへへ

## 5 リア、はじめての『豚』をたいじ

マドミス王国、ルーギス家

「お父様！ ビリーフィ」とよー。」

広く、そして豪華なダイニングにリアの怒氣をはらんだ美声が響く。長い艶やかな黒髪と黒曜石のような瞳を持った少女、リアに詰め寄られているのは随分と派手な飾りつけのされた服を着た、リアにお父様と呼ばれた男性、そしてルーギス家当主でもあるナナド・ルーギスだ。

声に怒りをにじませるリアにナナドは困ったような顔をする。

「まあ、落ち着きなれー。」

精一杯なだめようとするナナドだが、

「ふざけないで！ なんで私がお見合いなんか……！ しかもあるの豚と……！」

「豚！？ リア、なんてことを言つんだ！」

ナナドが慌てる。リアが豚呼ばわりした相手は、マドミス王国の第三王子だ。それと同時にリアの憤慨の原因、見合いの相手でもある。王族を豚呼ばわりをすれば不敬罪で絞首刑になりかねない。

しかし、リアも心中穏やかではなかつた。第三王子、イタリ・キナルカ・マドミスは女にだらしないことで有名な王子だ。国民の血税を無駄に浪費して己の脂肪ばかりを蓄える、まさに『豚』のような男なのだ。

今回の見合にもリアを側室として迎えたいということだらう、リアとしては、まだまだ嫁に行く気はないし、行くとしてもイタリのような豚はお断りだ。

さらば、

「そもそもなんで日取りが明日なの…？ 申し込まれたのは今日でしょ？！」

「頼む！ 会うだけで良いのだ、リア」

「ふざけないで！ 私が会うだけのつもりでも周りはそれを勘違いしてどんどん話を進めていくでしょ！ そんなの嫌よ！ 絶対嫌よ！ 死んでも嫌よ…！ ……むしろあの豚が死ね」

怒涛の勢いでナナドに言葉をぶつけると、リアはきびすを返してダイニングから出て行こうとする。

「リア… ビニに行くのだ！」

ナナドが出て行こうとする娘の背中に声をかけると、リアは一瞬だけ動きをとめて振り返った。

それにナナドは少しだけ安堵するも、

「冒険者ギルドでクエストを受けてくるわ！」

と、いう娘の宣言でペシリと固まる。

リアはそんな父親を一瞥してからきびすをかえし、ずんずんと廊下を進んでいく。

「リア様」

「ひあつ…？」

リアが自室へと向かう途中、曲がり角を曲がった瞬間に声が掛けられた。

突然目の前に現れたシグントにリアが驚き、間抜けな声を上げる。しかし、自分に声を掛けたのがシグントだと気づいたリアは眉をひそめた。

「…シグント、主を驚かすなんていい度胸ね…！？」

「申し訳ございません、リア様。…しかし旦那様を困らせるのもほどほどに致しませんと」

リアの怒りを孕んだ声を軽く受け流し、横を歩きながら進言するシグント。

「わかつてゐわ、そんなことより…これから一ヶ月くらいは家から離れてないといけないんだけど。…良いクエストないかしら？」

リアの言葉にシグントは一瞬考え込んだあと、

「…わつですね…、最近はリア様の腕も上がってきているみたいですし」

にやりと口角を吊り上げ笑うシグント。そして再び口を開き、あるクエストの名を言った。

「『黒竜討伐』…などはいかがですか？」

十日後、マドミス王国、ガラム洞窟

「……ち……、リア……ま、リア様！」

「うひやいー？」

リアは謎言語を口にしながら飛び起きる。目を開けると、頭上にはシグントのあきれたような顔があつた。

「ごめん……、眠っちゃつてた」

「それもいいですが……休憩はそろそろ終わりです。みんな自分の武器や防具の点検をしていますよ」

リアが周囲に視線を向けると、ギルドで『黒竜討伐』の依頼を受けた冒険者達が各自の武器の点検やポーションを用意していたりなどと忙しそうだつた。

パーティメンバーはシグントとリアを合わせて十人。

力に優れた獣人が二人。狼の獣人らしく白銀の毛に覆われた耳と尻尾が生えている。

スキル『獣化』で体を強化、ドラゴンに大きなダメージを与えていく役割だ。

そして、魔力に秀でた魔人が三人。今回は強力無比な障壁を持つブラックドラゴンが相手なので、彼らは仲間への支援魔法がメインになつてている。

最後にリアやシグントを含む光人が五人。重戦士のシグントを除い

た四人は素早く動いてブラックドラゴンを攪乱する役目である。

まあ、リアはシグント以外の誰の名前も覚えてはいないが。どうせ

ブラックドラゴンを倒せば一度と関わることもないだろう。

その役割分担をリアに聞かせた張本人、横のシグントに視線をやると、順々にフルプレートアーマーを身に着けていた。

（私も用意しないと…）

傍らにおいてあつた自分の荷物からレザーアーマーを取り出して装着する。

レザーアーマーといつても胸当てと手甲、腰のスカートといった、動きやすさを重視した軽装である。

ショートソードを抜いて、刃こぼれがないか確認。

貴族の娘であるのにもかかわらずこんなことをしていると、確かに奇異の目で見られることがある。

しかし、今回の父の話はまるでリアを政略結婚の道具を扱おうと言う話、イタリとのお見合いだ。

そんなことになるなら死ぬまで冒険者として自由に生きていたほうがマシだ。自分の好きになつた相手と結婚はしたい。ま、恋もしたことがない自分に運命の相手がいたとしても、想いを伝えられるかは不安だが。

ショートソードの刀身に映つた自分の顔を見ながらリアはため息をついた。

リアが知り合いの鍛冶師に打たせたそれは、銘を『ウイングレイ』という。

刃渡り50センチで柄は20センチ。本来は片手で扱うショートソードを、柄を長くして両手で扱えるようにしたものだ。

両手で扱うことによって剣を振る速度は上がり、刀身を短くしたことで重量は抑えられている。日の光が銀色の刀身に反射して煌く様子から、『翼の閃光』と名づけられた。

しかし、そんな光に満ちた剣は自分とは対照的だ、とリアは思う。めずらしい闇色の髪と目がリアのコンプレックスだ。

種族は光人なのに…、と場違いなことを考えながらリアはウイングレイを鞘に収めた。

用意を終えたのはリアが最後だったようだ。他のメンバーはみんな立ち上がって体をほぐしていた。

シグントはリアが準備を終えるのを見てから周りをぐるりと見渡した。

「みんな用意は終わったようですね。それでは、最後の作戦確認をしたいと思います」

その呼びかけに、リアを含む9人の視線が一斉にシグントに集まつた。

「いいですか？ まずブラックドラゴンに挑む前に、キナク達三人が支援魔法で全員の身体能力を強化。ブラックドラゴンとの遭遇後はシールドでパーティへの直撃を防いでください。回復も任せましたよ？」

シグントが魔人たちの三人に視線を向けると、キナクと呼ばれた魔人が頷き、後ろの二人を振り返る。

「そして、ブラックドラゴンとエンカウントしましたら、リア様含む光人の四人は動き回ってブラックドラゴンを攪乱してください」

はーい、と間延びした返事をするリアとシグント以外の光人、

「最後にカギルとクギル、あなた方はブラックドラゴンにダメージを与える役です。防御は考えなくてもいいので、全力で攻撃していく

ださい」

おう！ と野太い声を響かせるカギルとクギルと呼ばれた獣人たち。

「それでは…行きましょう…！」

「「「フィジカルブースター！…」」

シグントの作戦開始の合図を聞いた瞬間、魔人たちが身体強化の魔法スキル『フィジカルブースト』の広範囲発動型『フィジカルブースター』を発動。

辺りに仄かな光が満ちて、リアは自分の体が軽くなつていくのが分かった。

リアたちが座っていた場所からドラゴンのいる大洞窟まで50メートルほど、ドラゴンにはもう気づかれているだろうから、慎重に行く必要は無い。

全員が疾風のように洞窟の中を走りぬけ広い空間へと体を躍らせた。

「グウオオオオオオ…！」

ブラックドラゴンがリア達の姿を認めた瞬間、竜族特有の莫大なプレッシャーを咆哮に乗せて撒き散らす。パーティの大半が動きを止めた。それを気にせず動けているのはシグントともう一人、

「行くぜえ！」「おうよー！」

カギルとクギルが獣人特有のスキル『獣化』を発動・一人の肌が白銀の毛で覆われ、髪が伸びる。

筋力を一点強化する『獣化』、

全体的に身体能力を少しづつ強化する『フィジカルブースター』、

その二つの相乗効果で身体能力をパワーによりに強化させてから、洞

窟の中央に君臨するブラックドラゴンに飛び掛った。  
その一人の行動にリアは舌を巻く。

（ブラックドラゴン相手に何の躊躇もしないなんて……！　負けるのはイヤよー）

無駄な闘争心を發揮して、リアは体のギアを戦闘用へと徐々に上げていく。

「フッ……」

呼気を吐きながらブラックドラゴンへと突っ込んでいく。

半月を描くようにリアが走りこんでいくと、カギルとクギルが戦斧を手にドラゴンの正面と真後ろに回りこんでいたところだった。

「「ヌアッ！…」」

カギルたちが全く同じタイミングでブラックドラゴンへと飛び掛けた。  
しかし、

「グアアアアアアアー！…！」

ブラックドラゴンが翼を広げ、竜族の使う飛行用の竜風魔法『スカイウインド』を発動。

巨大な体躯を時計回りに回転させて飛び掛ってきたカギルとクギルを吹き飛ばした。

「チイツ！」

カギルが舌打ちとともに着地する。クギルもうまく着地できたようだ。

「今度は！ 私の！ 番よつ！」

一拍ずつ区切りながら気合を放つ。

ブラックドラゴンが着地した瞬間にウイングレイをドラゴンの足に叩きつける。

しかし、ギャリン！ と、鱗に刃が弾かれてしまつ。

「く…そおお！」

お嬢様らしからぬ悪態をついて、ウイングレイを何度も振るうリア。

「私たちも負けてられないわよお！」

他の光人の三人もリアに動きに鼓舞されたのか、各自の武器をブラックドラゴンにぶつけていく。

ブラックドラゴンにダメージは通らないまでも、頭に血を上らせることがらには出来たようだ。カギルとクギルへの対応も最初より力任せに、そして単調になつてきている。

「離れていなさい！ 『ライトスラッシュ』……！」

シグントが全種剣用スキル、光属性重斬撃『ライトスラッシュ』を発動させる。

大上段に振りかぶったシグントの大剣から真っ白な光が滲み出し、シグントの体を覆つっていく。

シグントが大剣を持つままかなりの速さでブラックドラゴンに接近、同時にリア達がブラックドラゴンからバッシュステップで距離を

となる。

「おおおおおおおおーーー！」

ドッ！ と、光が炸裂、大剣の刃がブラックドラゴンの鱗にめり込み、わずかに鱗が割れる。

「行けるぞ！ 置み掛ける！」

全員がギアをマックスまで上げ、ブラックドラゴンに攻撃を加えていく。

斬撃、斬撃、刺突、殴打、障壁、回避、斬撃、殴打、斬撃、回避、  
防御、スキル、刺突、刺突、スキル、斬撃、障壁、回復、刺突、斬  
撃、スキル、斬撃、斬撃 。

全員が渾身の力を振り絞つていく。

しかし、ドラゴンもただじつとしているわけではない。

右腕での薙ぎ払い、竜風魔法での回転防御、ファイアブレス、左腕での薙ぎ払い、ファイアブレス、薙ぎ払い、薙ぎ払い、ブレス、薙  
ぎ払い、ブレス、咆哮、ブレス、咆哮 。

リア達とブラックドラゴンの戦いが続く。

## 5 リア、はじめての「PC」とたのじ（後書き）

ほんとはもうと早くに投稿しようつと迷つたんですけど  
書いてた本文がPCの電源が急に落ちてロストしてから書く気がし  
ばらく起きました：

次の話も書いてあるので明日更新します^ ^

## 6 リアの初恋？（前書き）

リアのキャラが分からぬ...orz

## 6 リアの初恋？

竜族の中でも一、二を誇る戦闘力を持つブラックドラゴンは、やはり強かつた。

十分間の神経をすり減らすような死闘に加え、精神力と体力を消費する武器スキルの連発、集中力を切らしたカギルとクギルが仕留められ、光人の三人も体力が尽きたところを吹き飛ばされた。キナクたち魔人が回復魔法『ヒール』を使っていたので外傷は回復しているはずだが、直接『焼かれた』感覚や、『痛み』までもが回復できるわけではない。怖気づいて腰を抜かしているような状態になっているものが大半だ。

前衛メンバーが五人リタイアして、残るはリアとシグントの二人。それに後衛役のキナクたち三人の魔人だ。

「グルア！！」

轟！！ とブラックドラゴンがリアに向けてファイアブレスを吐いた。

一直線にリアに向かってくる灼熱の槍を前転で潜り抜け、高速移動のスキル『ダッシュ』でドラゴンに飛び掛つていった。

「敵を喰らえ…！」『エアロファングス』！！

リアの編み出したウイングレイ専用スキル『エアロファングス』ショートソードの特性である短い刀身、ツーハンドソードの特性である長い柄。

その両方を使って、リアは片手剣用スキル、一連撃技『デュアルフ

『アング』と、両手剣用スキル、風属性単発重斬撃『エアロブレイド』を同時発動。

武器スキルの力の源である双子の神の一人「ナヴィイス」が定めた武器スキル発動の条件はスキルに合った武器の特性があること。魔力と明確なイメージさえあれば発動できる魔法スキルとは違い、武器スキルには様々な制約とナヴィイスから人の動きを超えた動きをするためのアシストがある。

制約とはつまり、大剣用スキルを片手剣で発動しようとすると、スキル発動の要である神からのアシストが受けられないため、発動は出来るが体に負担がかかる。

しかし、逆に言えば、武器」との特性を理解し、一つの武器に組み合わせれば多種スキルの同時発動は可能と言つことだ。

『一連撃技『デュアルファング』と風の属性を付』した重斬撃『エアロブレイド』、これの同時発動が可能であることに気づいたリアは一週間ほどの修練でスキルの合成を完成させ、スキルカードのスクリーナーにウイングレイ専用スキル、風属性一連重斬撃『エアロファングス』（ナヴィイス命名）を加えた。

だが、『エアロファングス』がブラックドラゴンにヒットする直前、ドラゴンの右腕が動いて、リアを壁際まで吹き飛ばした。

「かふつ…！」

リアが身に着けていたレザーアーマーが裂け、肺からは強制的に呼気が吐き出された。

壁に叩きつけられ意識が飛びかけるもどうにか持ちこたえる。視界の隅でブラックドラゴンの腹がどんどん膨らんでいくのが分かった。

（まづい…！？ ブレス…）

リアは体に鞭を打つてブレスの攻撃範囲から逃れようとするも、ピ

クリとも動かずに洞窟の床に倒れふす自分の体が恨めしい。

「「「『プロテクトバリア』……」」

リアの絶体絶命のピンチを救つたのは魔人の三人だった。

ブラックドラゴンとの間に高速で三枚の障壁を展開すると同時に、ブラックドラゴンの口からも、ブオアツ！ と炎の奔流が流れ出す。三枚の障壁と炎がせめぎ合つ。しかし障壁が竜炎魔法に分類されるファイアブレスの為、ピシリ！ と、ひびが広がつていく。

キナク達は苦しそうに顔を歪める。

一撃だけを防ぐのなら一度の魔法に込める魔力だけで済むが、常に押し寄せてくる炎に耐えるためにキナク達は魔力を障壁に流し続けているのだ。いかに光人の十倍ほどの魔力量であつたとしても相当にキツイだろ？

「つおおおおおお——————！」

シグントが氣勢をあげてブラックドラゴンに斬りかかつた。重い鋼で作られたフルプレートアーマーを纏つていなかのような動きでブラックドラゴンに突っ込んでいく。

「セアツ！ ！ ！」

突進力を斬撃に添加し、シグントはブラックドラゴンの右足に大剣を叩き付けた。

ガイ！ しかし大剣はブラックドラゴンの鱗にふれた瞬間に弾かれてしまう。

「く…ツ…！」

ブラックドラゴンの腕が、動きを止めたシグントの真上に振り落とされた。

「がっしゃーん！」とござやかな音をたててシグントが崩れ落ちる。

「……シ……グント…」

リアは体を無理やり動かして、傍りに落ちているウイングレイを掴んで立ち上がる。

「君！ 無理だ！ ここは撤退しなければいけない！」

キナクがリアに走りよつて撤退を指示する。光人たちもなんとかシヨック状態から回復してシグントを一人がかりで運んでいる。

「なら……時間稼ぎは私がやるわー！」

こんなやり取りをしている間にもクギルが吹き飛ばされた。まだ、『焼かれた』ショックからは回復していないようだ。

「…………頼みました、おい！ 撤た ッ！」

キナクの撤退の指示が途中で途切れる。その原因とは、ドゴンツー！ と、リアとキナクの目の前の壁に何かが衝突したからだ。

「…………は？」

その場にいたリアや魔人たち、シグントと仲間を介抱していた光人が顔に「？」を浮かべる。

「…ツ！ いついたい何が？ あつ！ 頭からぶつかつたよーな気がする…大丈夫か？」

土煙の中から頭を押さえた一人の男性… というよりも少年が出てきた。歳はリアと同じくらいだろう。何事かを呟いている。

リアは己の目を疑つた。どこから出てきたというのだろうか、このガラム洞窟には入り口が一つしかなかったはず。

ブラックドラゴンのような膨大な魔力があれば最上位魔法スキルの一つである『テレポート』が使えるが、この男はどう見てもドラゴンには見えない。百歩譲つて魔人の最高クラスの魔力保有量であるならば納得もいくが、肌の色も魔人のようなアルビノではない。リアが思案にふけつていると、少年がこちらを向く。

（なにかしら？）

リアがそう思つた次の瞬間、少年は口を開いてとんでもないことを言つた。

「俺がこいつをやるから、少し下がつてくれないか？」

一瞬何を言つているのか分からなかつた。リア達十人でさえ敵わなかつたブラックドラゴンをこの少年は一人でやる、と言つているのだ。

「は？ あんた何言つて 」

リアは思わず聞き返そうとするが、それが終わる前に武器、おかしな形状をした剣を抜いて地を蹴つてしまつた。

「ちょつー あんた…！？」

少年は何らかのスキルを使つたのか、一瞬でドラゴンの前に進むと大きく飛び上がつて、剣を横薙ぎに振りぬいた。

「ラアッ！！」

少年の気勢とともにブラックドラゴンの腹に剣が滑り込んでいく。落下中にも何度も斬りつけている。

(嘘でしょ!? 何であんな簡単に…!?)

魔物の中でもトップクラスの硬さを誇る龍鱗を容易く切り裂いていくことに、リアは目を丸くするが、驚愕する事象はそれだけではなかった。

「グオオオオオオオオ！」

ブラックドargonが怒りの声を上げて大きく息を吸い込む、そして竜炎魔法のファイアブレスの上位版であるフレイムカノンを放つた。轟！！範囲攻撃の部類に入るファイアブレスよりも威力の高いフレイムカノンが、少年に向かつて大気を燃やしながら飛んでいく。しかし、少年は向かつてくる炎球を前に剣を大上段に振り上げてい る。

(何してんの！？) 炭になるわよ！？

リアがそう思つた刹那、少年の腕が震み、炎球が真っ二つに別れ、少年の背後に飛んでいった。

それは少年が剣で斬つたからだ、とリアの脳が認識するより早く、今度はブランクドラゴンの右足の傍に少年が現れる。

「セイツ！」

少年が剣を右手だけ持ち、大きく振りかぶったかと思つと「ブラックドランの右足が飛ばされ、血が吹き出る。

「ガアアアアア！－！」

「アヒルかお前は…！」

少年は「ブラックドランの叫び声に何か侮辱のような言葉を投げかけると、凄まじいジャンプ力で後ろの壁に体を向かわせる。タン！ と着地したかと思うと、それに倍する音を響かせて矢のように「ブラックドランへと飛び出した。

ズバン！－！ といつ轟音が響いたと思つと「ブラックドランの首が落ちた。

「え？」

リアの口から小さな呟きが漏れる。リアには何が起こったか分からないうちに「ブラックドランが死んでいたのだ。

リアに圧倒的な強さを見せつけた少年は、ふう、といつため息をつく。その端整な顔をリアは横からまじまじと見てしまう。そしてそんなリアの胸中に一つの思いが去来した。

（なんだろう…、胸が…苦しい…）

リアには未経験の体験であり、それが何かは分からなかつたが、聰明なリアはそれが俗に『恋』と呼ばれるものだつと、一瞬思つてしまつ。

しかし、

(恋つて……なんで? 『んなに苦しいものなの? ……ハハハ! 私が恋なんてするわけない!』)

リアも女の子である。だが、それ以前に警戒心の強い冒険者なのだ。ふんふんと頭を振つていて、少年は血払いのためか剣を振つている。ボボッ! と音がして、ブラックドラゴンの足が傷つけられた。そして少年の体から光が滲み出して薄れていった。

「ぬ…?」

なぜか眉を潜めながら少年は剣を鞘に収めた。そしてぼそりと呟く。

「…………あんま使つのやめよ! ハハ…、感覚鈍るわ…!」

んんー! と伸びをしている少年の背中をリアが見つめていると、少年が唐突に振り向いた。少年の視線がリアと交錯する。

(わつわつー、じつすればいいのよー)

パーティクになるリア、とにかく何か言わなければとこゝに驅られてしまつ。そして、口から出たのはリアの言おうと思つていた言葉と正反対のものだつた。

「あんた…何者なの…?」  
(何言つてんのよわたしい…!)

全力で己に突つ込むリア。本当はお礼を言いたかったのにー! と後悔していると少年が苦笑いしながら自分の手元を見ているのに気が

づいた。

「何者って言われても困るんだけど…」  
(もしかして…私警戒されてる…?)

自分が感謝をしたいと思つている相手に警戒されていると分かつてしまつたリアだが、魔人に『ヒール』を掛けてもらつて回復したシグントらの周りの目もあるため今更、態度は変えられない。

「えつと…、とつあえず一つ教えてほしいんだけど良い?」

少年の言葉に、なるべくけりを刺激しないよつこじている感情が読み取れて少し落ち込むリア。

(はあ…つて何で私が落ち込まなきゃいけないのよ…)

しかし、返事をしないわけにはいくまい。でもなぜか話しかけられない状態になつてしまつていてるのだがどうすればよいだろ。そこで、一番自分の意図を読み取ってくれそうなシグントに話を振つた。

「…シグント、どうする?」

シグントは少年からは見えないよつこじ、一瞬だけリアにいたずらっぽいウインクをしてから、少年へと向き直る。

そして、

「シグント…?」

いきなり少年に頭を下げたのだ。リアは思わず声を上げてしまつ。

「まずは礼を言わせていただきます。ありがとうございます。君のおかげで助かりました。しかし、それとこれとは別。君が突然現れた不審人物であることに変わりはありません」

シグントの不審人物と言つ言葉に反応したのだろうか、パーティの面々が少年を囲み始めた。  
しかし、少年はまるで動じずにシグントに話しかけた。

「はじめまして、シグントさん？ 僕はフジミヤ ポートって言います。あなたが不審人物って言つのも分からなくは無いですよ」

一度、言葉を切つて少年はスキルカードを取り出した。

「『わが身を証明しろ』、これでよければどうぞ？」

シグントにスキルカードを差し出しているが、リアの頭の中はそれどころではなかつた。

(フジミヤポート？ ポートっていうんだ…。ポートポート…。  
…それがなんだつていうのよ…。)

初めての一目惚れ、しかも恋愛をしたことの無い少女には想い人の名前を知つただけでも興奮する材料になるようだ。リアはそれが恋だと認めてはいないが。

「…君が名前については嘘をついていないのはわかりました。質問を聞きましょ」

シグントが少年、もといポートに質問の許可を出す。

「……」  
「……どこなんですかね？ それと、あなたたちは何でドラゴンと戦つていたんですか？」

（冷静だし……イタリなんかとは大違ひだわ）

「——の質問に関係ないことを考えてるリア以外のパーティメンバーの全員が目を丸くした。

「……え……ですか？……」  
はマドミス王国のガラム洞窟。私たちは最近ここに住み着いたブラックドラゴンを討伐するために結成されたパーティ——『黒竜討伐隊』です。それで君のことも教えてもらいたいのですが……」

「マドミス王国……？ すみません、なぜか自分の名前しか思い出せないのです……」

少し哀しそうな表情を見せたコートにシグントは、納得したような仕草をみせる。基本いい人だからだろう。

「すまない、悪いことを聞きましたね……。その詫びといつてはなんですが、先ほどの礼もかねて、マドミスの首都へと送りましょうか？」

シグントがリアの望んでいたことと全く同じことを言つてくれた。しかし自分の恋を認めたくないその口からは拒絕の言葉が出てしまう。

「シグント！ 怪しそうるわ！ こんな男をパーティに入れることは……、私は断固反対よ！」

「しかしですね……リア様、我々も疲弊しております……。先ほどの者の技量は見たでしょ。我々があそこまで苦戦したブラックドラゴンを簡単に倒したのです。戦力の拡大にはもつてこいでしょう

？」

リアが納得できる理由をつけるためにもつともらじくシグントが説得してくれている。

自分の中の乙女心が首をたてに振るうとするが、冒険者と恋愛に初心な部分がそれを邪魔する。

内心でリアが泣きたくなつてきついた次の瞬間、リアに声が掛けられた。

「あのー、リア様？」

「何よつ！？」

思わず乱暴になつてしまつた。…嫌われたかも、と落ち込む乙女心に、これでいいんだとわざやきかける冒険者の部分。しかし、

「なつ！」

「リア様…、貴女が私を嫌つていいことは良く解りました。ですが私は…貴女の側にいたいと…心から願つております。どうか短い間だけでも貴女の盾として…」

甘い言葉と共に手の甲に何かやわらかいものが押し付けられた。リアの頭の中が真つ白になる。と、同時に冒険者の部分の99パーセントがノックアウトされた。

「え…とえとえとえとー… わかったわ…！王都までなら一緒に来てもいいわよ…」

自分の顔が真つ赤になつていいくのが分かつた。しかし、残りの冒険者の部分が復活、邪魔をして「でもー」と続けてしまつ。

「……でもっ。」

聞き返してくる彼に一応、自分が「コード」を好きだったことがばれな  
ことについてはおぐ。

「あんたの「」ことが気になつてるわけじゃないんだからねつ……。」

しかし……最後に自滅していく「」と並ぶかないリアであった。

## 6 リアの初恋？（後書き）

突然ですが！！

皆さんにお願いがあります！！

えつと、主人公たちが使うスキルが全然思いつかないので募集したいと思います！

拙い作者に救いの手を差し伸べてくださる方がいましたら  
感想などに書き込んでくれると嬉しいです！！！！

お願いします！！！！！！！！！！

「それじゃあ、ブラックドラゴンの素材を剥ぎ取りましょ!」  
「

リアのシンデレ発言の後、シグントが俺に話しかけてきた。素材の剥ぎ取りとかできねーよーと、内心でじり答えるべきか迷つていると何故かリアが口を出す。

「『黒竜討伐』のクエストを受けたのは私たちだけど、実際に倒したのはあんただから素材の所有権はあんたにあるのよ。でも、その代わりにクエストの賞金は私たちがもらうけど」

懇切丁寧つてほどでもないがリアが説明してくれた。そこで、俺はある可能性に気づいてリアに質問してみた。

「へえ…、でも、それを俺に教えなければ素材全部を横取り出来たんじゃないかな?」

「少なくとも私やシグントはそんなことしないわよ。あんたが記憶を無くしてゐらしいうから教えてあげただけ」

「ありがと、リア様。優しいんだな?」

「なつ!/? べ、別に優しくなんか無いわよー。」

礼を言つたら怒鳴られてしまった。なぜだろ?。

リアがそっぽを向いてすたすたと歩いていってしまったので、ひと

まずそれは置いといて、シグントに剥ぎ取りの手伝いをレクチャーしてもらひことにした。

「えっと、シグントさん。剥ぎ取りのやり方も忘れてるみたいなんで…良かつたら教えてくれませんか？」

「いいですよ、それとシグントで結構です。話し方ももっと楽にしてくれると嬉しいですね、『コート君』

「オッケー、シグント！」

「あはは、それでは剥ぎ取りを始めましょうか」

そう言ってシグントはドラゴンの死骸の方に歩いていこうとするが、二三歩歩いてから急に俺に振り返る。

「そう言えば…『コート君』貴方のスキルカードに何か追加されてないか確かめてくれませんか？」

「え？」

「いえ、別に『コート君』のことを探るひつとしているわけではないですよ？ ドラゴンを単身で撃破したのですから『竜殺し』の称号が追加されていてもおかしくないでしょう」

それを知りたいのです、と続けるシグントに俺はスキルカードを具現化してみる。

フジ//ヤ ノウト

所有スキル『神速神武』『竜断ち』

『竜鱗』『竜力』『竜心』

称号『竜殺し』

「…シグント…『竜殺し』はあつたんだけどさ…」

「…どうしました?」

俺は自分のスキルカードに追加されていたスキルと称号を見てげんなりする。

なんだこりやー! と叫びたくなるのを我慢して「我、開かん」と呴き、シグントにスキルカードを開示した。『神速神武』の部分だけは隠しておく。

「これは…!」

シグントが絶句している。その顔が面白くて吹き出しそうになってしまった。

いかんいかんと首を振つてから、新たに増えたスキルがどのようなものなのかと質問する。

「スキルの部分を指で触ると詳しい情報が得られますよ? 生憎それは持ち主にしか出来ませんが」

ふーん、とあいづちをうちながら俺は『竜断ち』と書かれているところに触れてみた。

フォン! と一瞬だけカードが光つたかと思つと中に書かれている内容が変化していた。

『竜断ち』

刀用スキル、単発重遠距離斬撃。

衝撃波を発生させ斬撃を離れた場所に命中させるスキル。発声発動型

俺がスキルカードの中身を見て感じたことは二つ。

（重遠距離斬撃ってなんだ！ あと説明アバウトすぎんだろ… 「離れた場所に命中させる」… って…）

「シグント…他の見るにはどうすれば？」

「もう一度スキルの部分を触れば元の状態に戻れますか…」

シグントの言葉が終わる前に俺は片つ端からスキルにタッチしていつた。

『神速神武』

神の力を持つものに顯現するスキル

詳細不明

『竜鱗』

『竜殺し』の称号保持者特有スキル

物理、魔法、全ての耐性が大幅に上がる。常時発動型。

『竜力』

『竜殺し』の称号保持者特有スキル

筋力を飛躍的に上昇させる。常時発動型。

『竜心』

『竜殺し』の称号保持者特有スキル  
魔力の量をドラゴンと同等にする。常時発動型。

「…何だこれは…！」

俺は眉間にしわを寄せて低く唸つた。

「あ、忘れているかもしないので言つておきますが、自分の名前  
を触ると、今現在のステータスが分かりますよ。」

「おっけいーー！」

シグントが親切に俺に教えてくれる。俺がスキルカードを突き破ら  
んばかりの勢いでタッチするとまた画面が切り替わった。

フジミヤ コウト

魔力耐性	S	S	S	S	S
魔力					
体力					
敏捷力		A	S	S	S
物理耐性					

所有スキル数 5

(チート…だよなあ?)

俺はスキルカードに書かれた自分の能力に少し疑問を持つ。アース

でも剣道をやめてからはゲームやラノベも読んでいたので大体の予想はつくが平均が分からぬ。

そこで、とりあえず聞いてみる」とこした。

「えーと、シグント。参考までに聞いておきたいんだけど…うつて？」

シグントは「う」と呟つ言葉を聞いて、おや…といふような顔をした。

「やはううランクがあつましたか…、文献のとおりですね」

「…文献？」

「ええ、『竜殺し』を得るために単独でドラゴンを捻じ伏せる必要があり、『一ト君はそれをクリアしました。そして、過去に『竜殺し』の称号を持つた人には、筋力をランクにする『竜力』、魔力をランクにする『竜心』、物理、魔法耐性をランクにする『竜鱗』のどれかを取得できる」

そこで言葉を切つて、シグントは首を振つた。

「しかし、さつき『一ト君にスキルを見せてもらいましたが…』その三種類の全てを君は習得していました。それは過去に例の無いものです」

「へー、俺つてすいんだなー」

「はい、あれらのスキルは隠しておいたほうがいいかもしませんね」

「おけ、んじや剥ぎ取りにこいつか」

「……それだけですか？」

「……他に何が？」

俺の態度に、なぜかシグントは戸惑っていた。その理由を考えていると一つ思い当たることがあった。

「ああ、んで。Uランクって何?」

「Uランクは普通の光人の成人男性1000人分くらいの能力です。ちなみにAは100人分…って違いますよ…！」

「違うって何が?」

あくまで冷静にシグントに聞き返しながら、俺は己の異常性について考え始める。

(普通の光人…つてのが良くなきんないけど、1000人分ってのは尋常じやないだろ)

さて…どうするかねえ、と思案に耽る俺にシグントは呆れたような口調で呟く。

「『U』君は自分の存在が特別だつてことを知つたほうがいいですよ…」

それだけ言って、剥ぎ取りにこきますよ、とシグントは俺の手を引つ張つて行く。

しかし、俺は最強になるべくこの世界に来たのだ。最強が特別でなくて何になる。

俺はそこで思考を自己完結させ、おとなしくシグントについていった。

30メートルくらい歩いた場所には、ドラゴンの死骸が横たわっていた。

「なんか…よく見るとでかいよな…」

「何を言つてこらんんですか…、君が倒したのに」

田の前で見るブラックドラゴンの死骸は小山のようだつた。でも良く考えたら当然だよな…、頭の先から足まで20メートルくらいあるんだから。

と、俺はそう理由づけてからシグントの方を見やると、刃渡り30センチほどのナイフを鱗と鱗の間に突き立てているところだつた。

「それが剥ぎ取りつてやつ?」

俺が声を掛けると、ガスガス! と鱗と肉を剥がすシグントは振り向かずに入答えた。

「はー… いつやつて素材を『剥ぎ取る』んですよー。」

力んだ声と共にシグントの筋肉が盛り上がり、縦40センチ、横20センチほどの橢円形の鱗がベリツと剥がされる。

ブラックドラゴンの体から剥がされたそれは黒い輝きを放つていた。

「ふうん、結構綺麗だなそれ…」

「ドラゴンの鱗はかなり貴重ですから…とくにブラックドラゴンのものとなれば尚更」

そう言つてからシグントはまた新たに一枚の鱗を剥ぎ取りにかかりた。

俺は自分もやつてみようと思つて腰に帯びてゐる刀を抜く。少し離れた場所まで歩いて一枚の鱗に目をつける。シグントと同じように刀を鱗と鱗の間に突き立てて、てこの原理で剥がしにかかる。すると、俺が思つていたより鱗は簡単に剥がれた。

「おおっー。」

微妙な達成感があつた。それに意外と面白い。俺は調子に乗つてバリバリと鱗を剥がしていく。

10分もすると、俺の周りには剥がされた鱗が散乱して地面が黒く光つていた。

「こんぐらでいいかな……」

俺は落ちてゐる鱗を拾い集めてから、少し離れた場所で剥ぎ取りをしてゐるシグントの元へ向かう。シグントは鱗と格闘しているところだった。

「ここのへで大丈夫?」

俺が声を掛けるのと、シグントが鱗を剥ぎ取るのは同時だった。シグントは剥ぎ取つた鱗を抱えてから俺のほうを振り向いた。

「……どのくらい取れましたか?」

息を荒くして振り向きながら聞いてくるシグントに俺は鱗を突き出す。

「」んぐらいだけど……どうかな?」

「…! そんなことかたのですか!?」

なぜかシグントが驚いている。ていうか、せっかく驚いてばっかりだなシグント。

ふと、シグントの傍に置いてあつた鱗を見ると、数は……6。  
それに対して俺が取つた鱗の数は30を超える。

それは実にシグントの五倍の速さで鱗を剥ぎ取っていたといつゝことになる。

「ふむ」

シグントは俺の取った鱗を手に取り、まじまじと見つめながら点検している。

「すごいですね…、綺麗に剥ぎ取れます」

よっしゃ！ と俺がガツツポーズをとりながら喜んでいると、シグントは少し離れた場所にある自分の荷物から小さな袋を取り出してきた。

「『一ト君にお願いがあるのですが…、その鱗を私に売つて頂けませんか?』」

そう言って袋の中から金色に光る大きなコインを取り出した。

「この袋の中には小金貨が15枚入っています。『黒竜の鱗』はとてもいい防具の材料になるので、とても鱗三十枚分の60枚には及びませんが、残りの45枚は王都に着いてから支払います」

ああ、鱗の所有権は俺にあるから売つてほしいとか…、しかしシグントの言つ相場が本当かどうかは分からぬから、売るのは迷うな。

俺は、セイドーの考えを実行することにした。

「…………鱗三十枚で、その小袋の中身だけでいいよ」

「…………どうこうことですか？」

「交換条件つてこと。鱗の本当の相場と、それに貨幣の換算の仕方、価値を教えてほしい」

俺が満面の笑みで理由を伝えると、シグントは少し黙り込んだ後面白そうに笑った。

「…………やつぱり…」「ポート君は面白いですね…」

ハハハ！ と愉快そうに声を上げて笑うシグント。

「では、答える代わりに逆に一つ教えてもらいましょうか…。よろしいですね？」

悪戯っぽい微笑を浮かべながら俺に問いかけてくる。俺は、コクン…と首を縦に動かしてそれに応答した。

シグントは周囲をきょろきょろと見渡してから口を開いた。

「リア様がいないから言いますが…」「ポート君、君は記憶喪失なんかじゃないですね？ 私の考えでは…」

拳銃不審に辺りを見渡していたのはリアを探していたらしい。

俺の秘密を暴くかの様なことを言つて一度、言葉を切るシグント。

俺は「クッ…と喉を鳴らしてシグントの言葉の続きを待つ。

「異世界人ではないですか？」

シグントに、俺の正体がバレた。

## 7 名探偵シグント！？（後書き）

大幅な加筆修正しました。

読み返してもらえると嬉しいです。

九月八日

「異世界人ですか？」

シグントの問い。それはまさに俺の秘密そのものであったが、どうして言い当てられたのだろうかと考える。

無論、シグントには悟られないように無表情を貫く。問い合わせられたときには一瞬だけ目を見開きそうになつたが、ピクりとまぶたが動くだけだったと思つ。

（どうして分かつたんだ？　いや、カマをかけてるだけかもしれない。様子を見てみるか）

「…何言つてんの？　シグント」

「ですから…君は異世界人ですか？」

目を逸らしながら「まかす俺、しぶとく聞いてくるシグント。よく考えてみると、何のヒントもなしに『異世界人』というワードが出てくるわけが無いのだ。

シグントにはバレてると思つたほうがいいだろう。

「…あー、そうだよ、俺は異世界人だ。…なんで分かつた？」

俺は頭をガシガシと搔きながらシグントに白状する。するとシグントは少し笑つてから語りだした。

「私は意外と本を読むのですよ。昔読んだ歴史書に書かれていました

た。過去に一度、このガラム洞窟には異世界からの旅人が現れます。一人は世界最強の大魔法使い、もう一人は世界最強のドラゴンライダーとしてこの世界に名を馳せました。そして、その二人の共通点はこのガラム洞窟に現れたことと、一人が現れる直前には必ずブラックドラゴンがこの洞窟に住み着いたこと」

まあ、他の種類のドラゴンも住み着くのですがね、と真顔で聞く俺にそう続けてからシグントは俺の顔をじつと見つめてからニヤッとした。笑った。

気持ち悪い。

（どうこうことだー！　聞いてないぞ糞イエス！ーーー）

心中で色々と説明不足な神様に悪態をついていると、俺の脳裏に一つの疑問が浮かぶ。

「へえ、でもそんな話が広まつてたら、またここにブラックドラゴンが住み着くと騒ぎになんじゃないか？」

「ええ…ですが、300年前と600年前の話なので大丈夫だと思いますよ」

「じゃあ平氣…か？…それより俺の質問にも答えてくれよ？」

俺は自分が色々答えさせられていること苛立ちを覚える。それと同時にシグントがかなりの頭脳を持つていることを悟った。

（さつき一度信じたように見せたのは…俺を欺くためのブラフか…）

そして苦笑いしてからシグントに交換条件の答えを促した。

「わかりました。鱗の相場…でしたね？　『黒龍の鱗…この品質

に光以外の魔法耐性の上昇効果付きですから、一枚につき小金貨八枚と言つたところでしょつか」

「ツ…！？」

本当の相場を聞かされて絶句する俺。いくらなんでもボッタクリしきだろシグント…。

思わず、頬を引きつらせてしまつ。まさかシグントがそんなに狡猾だと思わなかつた。

「…切り刻むぞシグント」

「ハハハ…。落ち着いてください。竜を殺せる君が言うとしゃれになりませんよ…。次は貨幣の換算…つまり数え方でしたね？」

「…もつたいぶるな、…切り刻むぞ」

「だから落ち着いてください！ 本当に殺氣が出てますから…」

俺は無意識のうちに殺氣をぶつけてしまつていたらしい。それにシグントは冷や汗を流している。

そんなつもりは無かつたのにフハハハ。

心の中で邪悪な笑みを浮かべてシグントの解説を待つ。

「小銅貨十枚で大銅貨一枚、大銅貨十枚で小銀貨一枚、小銀貨十枚で大銀貨一枚、大銀貨十枚で小金貨一枚、小金貨十枚で大金貨一枚です！」

シグントが焦りながら一気に教えてくれる。

そのビビリっぷりに心中で大爆笑しながら俺は次の質問の答えを促す。

「最後のは貨幣の価値だ。答えろ」

わざと脅すような口調を使って、刀の柄に手を置いてやるとまわす冷や汗をながすシグント。

ざまみる俺をだまそうとした罰だ。

ビクつきながらシグントは口を開く。

「貨幣の価値…えーと、答えづらいですが…平民の一食が大銅貨五枚ですかね」

俺の一食は五百円くらいだから、小銅貨一枚十円つてどこか。なら大銅貨は百円、小銀貨は千円、大銀貨は一万円、小金貨は十万円、大金貨は百万円。

（うん？…てことは鱗一枚八十万だから三十枚で一千四百万…か。シグントは四分の一の値段で俺に売ろうとしてたから六百万のさらいに四分の一で俺に入るのは百五十万？）

すぐねえなあ…、とため息をついていると、

「これで交換条件は終わりですね？ 代金です」

と言つてシグントが小袋を渡してきた。

俺が中身を見てみると、その中には少しこんな金貨が確かに十五枚入っていた。

その中の一つを小袋の中から取り出して眺めてみると、なかなかに綺麗な装飾が施されていた。

「ほい、鱗」

「ほい！ とシグントに鱗を投げ渡してやる。」

「さつきの切り刻むつてのは冗談だよ。王都までよろしくなー。」

わかつてゐとは思つけど、と脅しすぎたかも知れなかつたのでシグントとの交友関係を回復しておこつとする俺。

「はい、お願ひしますね？」

しぶいバリトンボイスで敬語を使われると、なんか違和感あんだよ

な」と今更ながらに思つたが、それはそれた

卷之三

「布ですか？」これでよければどうぞ？」

布の大きさは縦横2メートルくらいで鱗を包むには十分な大きさだった。

俺はそれを受け取ってからトックドーンの死骸の元へと向かった。

と、死骸にたどり着いた俺は掛け声を上げながら片つ端から黒い鱗を剥いで回る。

剥ぐに剥ぐ」と二十四枚、俺は光沢のある鱗をベリベリ剥いで行くうちに洞窟の反対側の壁にまで到達、そこで一つの歪な形をした球

体を見つける。これは、

「卵…か？」

アースでの箱根の黒卵のような見た目をしている。

違うのは大きさだろうか、この卵は大きさが一メートルほどもある。

「玉子焼きにでもするか…」

黒卵を見て、俺は「こちらに来てから何も口にしていない」と思いで出す。

鱗をかき集め布に包んでから背負う。そして卵を抱えるとシグントの元へと歩いていく。

「おーい！ シーグント？」

卵は思ったよりも軽く、簡単に持ち運ぶことが出来た。

シグントの元へと卵を運び、田の前にそっと置いた。

シグントは卵を見ると大きく目を見開いた。ふるふると体を小刻みに震わせている。

「…………これはダラゴンの…しかもブラックダラゴンの卵じゃないですか…！」

「そうなの？ ま、とりあえず焼いて食べるか「焼いて食べる！？」

「!？」

シグントが俺の言葉を遮つて叫ぶ。

なんでそんなに驚いているのだろうか。理由が分からなかつたため、冷静に対処することにする。

「うん、焼いて食べる。火イ頂戴?」

「何言つてるんですか！？」リア様、リア様ちょっと来てください

11

シグントが何故かリアを呼んだ。

ちなみにリアは洞窟の壁に背を預けてうとうとしているところだった。

可憐らしい声を上げていた。

あ、こつち来る。

「なんか用かしらー!? ! ?

ダッシュで走り寄りながらシグントを怒鳴りつけるリア。なんか怖いな。

「申し訳ありません…」しかしコート君がブラックドラゴンの卵を焼いて食べると申すのですから」

シグントとよく似たアクションをするリアだが、大きく見開いた目をそのまま俺の方に向けてくる。

「あんたねえ！ ブラックドラゴンの卵を食べるとか有り得ないからー！」  
「なんで？」  
「ブラックドラゴンは存在 자체が神格化されてるのよー！」

「ツ！ 人に害を与えるかもしれないから仕方ないのよ！」  
「はいはいご都合主義乙です」  
「バカにするなあ！ ！ ！ ！ ！」

「ちよつ…… 何で剣を抜くんだよ…」

「こちらの世界にないはずの「ご都合主義」です~」 といつ言葉のコアンスがからかっているものだと分かったのだろう。腰の剣を抜き放ち振り回すリア、そしてその凶刃から逃げ続ける俺。

それを五分ほど繰り返しリアの体力が続かなくなつたところで、命懸けの鬼ごつこは終了。

ちなみに俺は汗一つかいていない。すごい体力だな…、以前の俺なら息ぐらには乱れていただろ?『『竜殺し』の称号すげーな。

「ハアハア……とにかく、食べるなんて許さないわよ……」

「はいはい、それでどうするんですか?」

うーん、とリアは「」に手をやつて可愛い思案顔を作る。

「あんた、魔力値はどのくらい?」

「魔力値って何だっけ? ああ、さつきスキルカードに出てた奴のことだろ?」

リアは俺の魔力の大きさを聞いてくる。それにどう答えるべきか少し迷う俺。

「えーと、Aランクだけど?」

実際のランクより一つ小さいものを教えておく。それなら大丈夫だろ、そう思つての発言だったのだが。

「A…? そんなに高いの!?」  
「そうだけど…」

「好都合じゃない！」

やべ、なんか間違えたか？ そう思つたが、それはいらぬ心配だつたようだ。

リアは重そうに卵を抱いて俺の前に置く。

： そんなに重かったかな？ それとも『竜力』の恩恵がそれほど凄いものなのか。

俺は、自分のスキルの力に興味がわき始める。本格的に思考を開始しようとすると、

「ちょっと、この卵に手を当てる！」

リアの声で現実に引き戻される。まあ、後で考えればいいかと思思考を頭の隅に押しやり、言われるままに俺は卵に両手を当てる。

「次は魔力を流し込んで！」

「…………」

いきなり、魔力を流し込めとか言われても困るだけである。仕方ない。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥だ。

「……どうやってやればいいですかリア様」

「……あんたつて記憶無いんだっけ」

えつとー、と考え込むリア。

やがて、なにか得心がいったように手をポンと打ち合わせる。

「ちょっと手を貸して？」

突然、リアに両手を握られる。

意外にすべすべとしている陶器のような白い肌だったが、手の平には硬いマメがあつた。

それなりに努力しているのだろう。

「魔力を流し込むから…後は感じて？」

そう言つや否や、リアは目を閉じる。なにやつてんだろ、と俺が思うのも束の間、

「なんだこりゃ…？」

何か得体の知れないものが手の先から流れ込んでくる感覚。それは、手の先から全身を巡り、そしてまた、握られた部分から抜けていった。

「これが魔力か…」

魔力を流し込む、といつのは体の中を流れるエネルギーを意識してそれを外に放出するようなものなのだろう。納得がいった。俺はリアに声をかける。

「もつ、いいよリア様」

声を掛けられてリアは目を開ける。俺とリアの顔の距離は10センチほど、何故かリアは固まつてから、段々と顔を赤くしていった。

「あつ…！ そう？ 分かったならいいわ…」

ギュン！ とリアは高速で首をそむける。それから、卵を指差して、

「卵に魔力を流し込んで……！」

「オッケー」

短く返事をして俺は卵に両手を当てる。  
先ほどのリアとは違い、輪のよつに魔力を通すのではなく与え続け  
る。

（まずは魔力の通り道を認識、それに掌といづれ出口を作つてこれに  
流し込む。両手から…一方通行で…）

黒い卵にどのくらい魔力を注ぎ込んでいたんだろうか。

流し込むうちに、ピシッ！ と卵にひびが入る。

「おー?」

感嘆の声を上げる俺の前で、ピシッ！ ピシリー！ そのひびはざん  
どん広がっていく。

「おおー？」

そして、ペシペシペシー。とひびが連續して出来たかと思つて、

「がおー」

中から、小さく、そして黒い、ドラゴンが現れた。

## 8 デリケンの卵？（後書き）

大幅な加筆修正しました。

読み返していただけると嬉しいです。

九月八日。

9 ニューハンの秘密ー? (前書き)

スキル募集中ですー! !

「がおー」

「この鳥も声をあげて、小さな炎をげつぱと共に吐き出しながら、親のブラックドリゴンをそのままかくしたかのような小さくアゴンが現れた。

俺とシグントとリアが揃つて黙り込む。俺たちが固まりながらドラゴンの幼生を見つめ続けている。

そりでいる内はトマトの赤が、トマトはトマトで、トマトで自分の入っていた殻をポリポリとかじり始めた。

『ノルマニカ』

一分間で麺を全部食べてしまふ。アーニーは卓を離れて、さよならと見回して立つ。

そして よだよだと歩くと俺の胸は飛び込んできた  
ベビー・ドラゴンの唐突なその行動に、俺は驚愕に目を見開く。

「なう…」  
「ぐるぐる

ベビーチェアは座り込んでいた俺の膝の上で体を丸めると、甘え

たような声を上げる。

それにどう対応するべきか迷つたが、とりあえず頭から背中にかけて優しくなでてやつた。

「ぐあ」

俺の膝の上で気持ちみなつかつな声をだすベビーードリーパンを横田で見ながら、リアが口を開く。

「アンタのこと…親だと思つてゐみたいね」

「親? 『刷り込み』つてことか…」

「すりこみ?」

「ん? えつと…最初に見た物を親だと思い込む習性のこと」

「ふーん」

「ゴート君!」

「え? …あつ…」

ベビーードリーパンの鱗のすべすべとした感触に、つい気が緩んでしまつていた。

リアはお嬢様っぽいのに『刷り込み』を知らないことは、この世界では伝わらない言葉なんだろう。

急いでさつきの発言をフォローしようとする。余談だが、フォローつてのは「ついていく」つて意味なんだよな。日本で使われている意味は変化したものらしい。

「まあ、どこかの本で読んだ知識だけど  
「そつなんだ、意外と物知りなのね? アンタつて

リアは特に疑つこともしなかつたので、俺は胸を撫で下ろした。  
ふー、とため息をついているとシグントが小声で話しかけてくる。

「（気をつけてくださいね……）」

「てか別にバラしても問題ないよつた氣がするんだけどな」

「（声が大きい……）」

「どうしたの？」

俺とシグントが「ソソソソ」してくるのを不審に思ったのか、リアが声をかけてくる。

それに、ビクッと反応するシグント。

「い、いえいえ……何でもありますよ、リア様」

「？ ならいいけど、ねえ「ホールド」の子撫でてもいい？」

「あ、ああ……いいぜ？」

二人揃つて冷や汗を流しながら「まかす。

だが、リアはベビードラゴンに興味津々のようだ。

目を輝かせながら、しかし恐る恐るといった感じでベビードラゴンに触れる。

「……可愛い……」

「ぐる~」

目をキラキラさせながらリアがベビードラゴンを撫でている。

そこで、ふと俺は一つのことを思いついた。

「わうだ、ここに名前付けないと……」

「名前？」

リアが顔を上げて聞き返してくれる。

そのときリアは俺の顔を見上げる形になり、急に顔を赤くすると後

ろに飛び退る。いや、実際にそんなことをしたわけではないが、それに迫る勢いで後ろに下がる。

「……どうかした？」

「ツ！ な、なんでもないわよ！」

俺が呆れたようにすると、リアは何故か気分を害したように口調を荒くした。

「……まあ、お前決めちゃおうぜ？」

話を逸らさず、何でリアは怒ってるんだ？。俺何かした？

「そうですね」

「早く決めなさいよー！」

シグントは普通に賛成してくれたが、リアは怒っている。もう一度言つが俺が何かしたか？ 知つてゐるなら誰か教えてくれ。心中で呴きながら、俺はベビードラゴンの名前について考え始めた。

（どうすっかな…。うーん…、ブラックドラゴンだからブラック？いや、なんか不吉そうだから…ラックってのはどうだ？）

一度思いつくと、「ラック」という名前が頭から離れなくなってしまった。

俺は、シグントとリアに早速提案してみることにする。

「なあ、二人ともー ラックってのはどうだ？」

「…………」「…………」

「……だめ？」

“しぐんと と りあ の ちんもく こうげき！”  
“じうと の ないーぶ な こころ は だめーじ を うけた  
！”

俺は本格的にへこみそつになる。自信満々で提案しただけにダメージが大きい。

穴があつたら隠れたい！ と思うがガラム洞窟はそれ自体が大きな穴であることに気づき自分の頭を切り落としたい衝動に駆られた。

「いいんじゃない？」

「私もそう思います」

刀を抜きそうになつた寸前で一人が口を開く。  
この一人には知りようのないことだが、俺の自滅寸前の心と命を救つたのである。原因を作つたのもこいつらだが……。

「……じゃ！ 今日からお前の名前はラックだ！」  
「がるーー！」

言葉が分かつたわけではないだろうが、ベビードラゴン改めラックが嬉しそうな声を上げる。

俺はラックを膝からどかし、立ち上がった。  
シグントにラックを押し付けると本当のラックの親であるブラックドラゴンの死骸に向き直る。

「そろそろ出発だろ？ 先に行つといて！」

それだけ言つて、俺は刀を抜き放つ。

シャリンッ！ と青白い刀身が外気にさらされた。

そこで、俺はやはり刀の感触に違和感を持つ。それは……刀が重くなっているのだ。

『竜力』の影響で筋力は以前とは比較にならないほどに上がっていくはずなのに、以前より重く感じる。

「……なんだ？」  
「……まあ、後で考えよつ

小さく独り言を呴いてから俺は刀を大上段に構える。  
神経を手に集中させ、そして呴く。

「竜断ち」

۲۰

斬ツツツツツ！－！－！と俺の刀が凄まじい速度で大気を切り裂いた。音速すら軽く凌駕するその斬撃は、指向性を持たせた衝撃波を発生させる。

「ボツッ！」と、電速に迫る速度の斬撃破でトランクスの体の一部が消し飛んだ。

俺はそれをチラリと一瞥すると、

『うき断り』『うき断り』『うき断り』『うき断り』『うき断り』

『龍断ち』『龍断ち』

ボボボボボボボボボボボボボボボボボツ――――

一分後、ガラム洞窟の壁は隅から隅までドリフトンの血液で彩られたことになった。

後日、俺が聞いた話ではガラム洞窟にドリフトンが住み着くことは無くなつたと言つ。

「ま……親の死んだといひなつて、子供が見るものじゃないだら

俺の眩まは誰にも聞こえずに……洞窟の壁に染み込んで消えた。

「お待たせーー

洞窟の半ばまで進んだところと合流することが出来た。

「せつと行くわよーー

「まこまこ

リアに理由も無く怒りあわててドリフトンの笑顔で受け流す。

じぱりく他愛の無い話をしながら、シグントの仲間たちと一緒にしていると一時間ほどで洞窟の外に出た。

俺は強烈な太陽光に目を細める。

「まふしつー」

「当たり前でしょ？」

何をバカなことを…と呟くリアに俺は苦笑いしながら隣で歩いているラックに視線を向けた。

「ぐぬる」

楽しそうにしてこのラックを見て、まあいかと俺も笑った。  
背中を撫でながら、前を歩くリアたちについていく。  
すると、急にリアが振り向く。

「本当に王都に行っていいの？」

「おつけー」

このときも軽く了承したリアの言葉の意味に俺が気づくのは…

おれりへー話べりこ後だろ。。

## 9 デザインの知見ー? (後書き)

最後の方がよくわからない駄文になってしまった…

以後気をつけます!

この度、小説の題名を変更いたしました^ ^

真っ白い空間の中に、二つの人影がある。

その一つは、アーバニアの全ての生命と大地を創りし神「ナヴィス」

今、その双神達はお互いに武器を持ち、壮絶な戦いを繰り広げているところであった。

「なんで浮気なんてしたのよー！」

絶世の美貌を持つ魔の女神ルビアナが怒声とともに手をナヴィスにかざす。

轟！！！  
と曰大な火球がナヴィスに襲いかかつた。

その数、優に百を超える。

ドガガガガガガガガガガガガツ ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

しかし、ワイルドな風貌を持つ美男ナヴィスも、巨大なクレイモアを片手で振り回しその全てを剣圧だけで吹き飛ばす。

「だーから誤解だつて！！」

先ほどから必死に説得するも、妻であるルビアナは怒りを鎮めようとしない。

舌打ちしてから、虚空からもう一本の剣を取り出す。

真っ赤に燃えるような刀身を持った神器『ボルケイノブラッド』。本当は人間たちが住む場所の最奥のダンジョンに封印したものであるが緊急事態だ仕方ない。

「田を醒ませ…『ボルケイノブラッド』」

ナヴィスが呟いた瞬間、赤い刀身から焰が溢れ出し、右手ごとボルケイノブラッドを覆つた。

刀身は摄氏八千度を超える炎に耐えきれずにドロリ…と溶け出す。しかし、それはボルケイノブラッド本来の姿だ。

「ハツ！」

ナヴィスの右手が震む。すさまじい速さでボルケイノブラッドが振られ、焰の刀身は遠心力でその姿を伸ばした。

キュガツ…！と轟音が響いた。ナヴィスが放つた必殺の威力を孕んだ炎撃を、ルビアナが反属性の水の盾で受け止めたのだ。小規模な水蒸気爆発が発生する。

「妻にこんな攻撃を…、許せない…！私をそんなに殺したいなんて！」

「え…？ ちょ… それも誤解…」

「問答無用…！」

ナヴィスの言い訳を黙らせるトルビアナは右手に魔力を集中させる。

「……！ それはまずいって……！」

ナヴィスが冷や汗を流す。トルビアナが貯めている魔力は、単純なマナバレットに変換したとしても次元を一つ消し飛ばせるレベルのものだったのだ。

魔力のロスが激しいマナバレットでも次元を消し飛ばす一撃を、ルビアナは原始の力『闇』へと変えていく。

光さえも捻じ曲げすべてを押しつぶす『重力球』へと。

それがトルビアナが使おうとしている魔導の正体だとナヴィスは考え、『闇』の反属性である原始の力『光』をボルケイノブラッドに集中させる。

光と炎が混ざり合い強力な『光』を作っている。

ボルケイノブラッドの刀身は姿を変えた。

この世で最も光を放つ物体『太陽』へと。

ナヴィスはボルケイノブラッドを構える。

トルビアナは右手を左腕で支え照準をつける。

カツツツツツツツツツツ……！

二つの原始の力がぶつかり合い、一瞬だけ空間に『無』が満ちた。

「まったく…早くしてくれないと世界が滅びちゃうぜ…？」 イエス  
よお

ナヴィスはため息をつきながら、別の世界の一人の友のことを考え  
た。

ガラム洞窟を出発してから六日後、王都まで後数時間。

俺、藤宮紅都は今、リア達に冒険者ギルドから支給された三台の馬車の一台、リアとシグントが乗つている馬車に乗車していた。

しかし、屋根の上に…だが。

ここで勘違いしないでほしい。

別にいじめられているとかそんなことではない。

「あー、気持ちいいー」「ぐるー」「ぐるー」

現在のアーバニアの気候はアースの春のものとよく似ていた。馬車に乗った最初の三日にこちらの常識のことをシグントから叩き込まれて、気分が滅入っていた俺は、気分転換のために屋根に登つてみた。

そこで俺は気づいたのだ、屋根の上でする昼寝の素晴らしいことに。

「三日間寝てるけどー今日は格別だなー」「ぐるー」

俺の眼下には青々とした野原が広がり、頭上には雲ひとつ無い青空からぽかぽかと太陽の日差しが降り注ぐ。まさに絶好の昼寝日和だ。

春の日差しの中、俺の頬をやわらかい風が撫でていき、俺はブラン

クドラゴンの幼生のラックと共に夢の世界に誘われ

「ツ！？！？

俺は夢の世界から引き戻され、すぐさま飛び起きた。音のしている方向に目を向けると、茶色い絨毯が蠢きながら馬車に突進してくるところだった。

「？」えつと…茶色い鱗に小さい翼、短い四肢と低い重心…。ランダードリゴンか?」

俺はシグントに叩き込まれた知識から動く絨毯の正体を想像する。

「ハンドドラゴンの群れだ——！——！」

俺の推理を裏付けるかのように、他の馬車の御者をしていた男の光人、レンカが大声を張り上げた。他のパートイメンバーも馬車の窓から顔を出しランドドラゴンたちを見ている。

窓から顔を出して後方を見ているシグントに声をかける。  
俺の問いにシグントはラングドーラゴンを見ながら、

「…通常は多くとも十五ほどなのですが…、ハンドルアーティストを統率する女王が生まれたと考えたほうがいいでしょうね」

「そいつ倒せばみんな引くか？」

ま、全滅させてもいいんだけど……と言葉をつなげながら俺は腰の刀の柄に手を置いた。  
そこで、ふと俺はひとつのことと思つてついた。

「シグント、魔法つてどうやるんだっけ？」

幸いランデラゴンの足は馬車よりも遅い、下位種とは言え竜族なのでスタミナはあるがそれも三時間ほどで切れるだろう。  
魔人たちが風の魔法を使って軽くした馬車なら走りきれるはずだ。  
つまり、追つてくるだけのランデラゴンなどただの的というわけだ。

「全く……、ランデラゴンが不幸に思えてきましたね」

シグントは苦笑しながら一度、頭を馬車の中に引っ込める。

「リア様！ 起きてください！」

「何よつねやいわね……！」

どうやら絶賛昼寝中だったリアを起こしていくようだ。

ところがこの地響きの中寝続けていらっしゃるのはすごいこと、と俺は素直に感心する。

「簡潔に言います。コート君に魔法を教えてあげてください」

「…………はい？」

「困惑するのはわかりますがまずは馬車の後方を見てからこなさつて下さい」

シグントに言われ窓から頭を突き出すリア。

黒髪が風になびく。髪の間からちらりと見えたその表情は驚きに染まっていた。

「なんでランディドリゴンが！？」

「詳しいことはまた後で、今はとりあえず馬車の上に上がってください。コート君の魔法の練習です」

「何で私が…」

「最初に魔法を教えたのはあなたですよ？ 無理にとは言いませんが…」

論争に負けて、しょうがないわね…！と、機嫌斜めなリアなぜか頬を赤くしながら窓から身を乗り出した。俺はリアに手を差し伸べて引き上げようとする。

「…別にアンタのためじゃないんだからねつ…！」

屋根に上ったリアがそんなことを言つ。あくまでツンデレ路線で行く気だらうか、デレは見たことないのでフラグも立つていなが。

「ゴホン！」と咳払いしてからリアは魔法についての講義を始めた。

「魔法って言つのは明確なイメージとそれを発動させるための魔力量が必要なの。たとえば水の槍を想像しながらファイアの魔法を使つても失敗するつてこと」

「ふむふむ」

「あと魔力量を超える魔法は使えない。えつと…具体的に言つとファイアとかの基礎魔法の消費魔力を1だとすると光人の平均魔力量は15くらいかしらね、派生魔法には大体3くらいの魔力が必要よ」

「後は？」

「残りは魔法の名前ね…、『ファイア』って唱えてみて  
はーいリア先生」

俺はおざなりな返事をして、馬車の上で仁王立ちになると、うしゅーるな光景を演出しながら体の中に流れる魔力をイメージする。その流れが手の先を通りたびに少しづつ抽出していき、全体の百分の一ほどが集まつたところでそれをやめる。「え？ ちょ…！ 何やつて！」

今度は『火』をイメージしていく。火の玉が手をかざした方向に放つイメージをつくる。

そして、

「『ファイア』！」

ボウツッ！！ と俺がスキル名を唱えた次の瞬間、手の平の先に直径二メートルはあるうかという巨大な火球が発現した。

「！？」

俺が驚いて手を空へ向けた次の瞬間、轟！！ と周囲の酸素を喰らいながら火球は空へと放たれた。

ギシッ！ と俺の体に反動が押し掛かり足の下にある馬車が軋む。火球は五十メートルほど空を飛ぶと、花火のように爆散し紅蓮の大輪を咲かせた。

「…………」

俺とリアは馬車の上でそろつて空を見上げた。  
やがて、リアが何かを重い出したかのように口を開いた。

「…ねえ」

「…なんでしょう」

リアは回れ右をすると俺の腹に強烈なボディブローを浴びせた。ドス…！ と鈍い音を立てて腹にリアの拳がめり込む。

「がつ…！？」

俺は肺から息を吐き出しながら、リアの突然の『乱心になす術もなく屋根の上に転がった。

よひよひと右腕をリアに向ける。

「何…すんだ…、リア様…」

息も絶え絶えに抗議の声を上げる俺を、リアは絶対零度の視線で射抜いた。

ふー…！ と自分を静めているかのように呼気を大気中に吐き出す。足は小刻みにトントンと屋根にリズムを刻んでいる。

「誰が…発動しなさいなんて言つたのよ…！ 私は『ファイア』って唱えてみて…って言つたんだけど…？」

リアの背後に鬼が見える…。このままでは殺られる… と俺は自分の未来を予期してしまい戦慄する。ゾクッ！ と背筋が凍つた。

「えつと…悪かった！ 許してくれ！ リアに良いとこ見せたかったんだ！」

命を守るため、土下座しながら苦し紛れの言い訳。

自分で「ムリあるなあ」と思つが頭上からリアの雷が降つてくることは無い。

俺は恐る恐る顔を上げる。するとリリアは、赤く染まつた自分の頬に手を当てるリアの姿があつた。

「私に良ことこのを見せようなんて… キヤーーー！」

などと小声で咳いていた。意味がわからなかつたがとりあえず声をかけてみる。

「あのー…………リア様？」

「ツーーー！」

俺の声にリアはビクッと反応する。ゴホンゴホンと咳払いをして、

「まあいいわ、本当は魔力を使わなければ魔法が失敗することを教えたかったんだけど。アンタみたいに魔力値が高いのには関係ないかもね」

「…………」

「なによーーー！」

「……いえ何でもいいやーいません」

少し黙り込んでいただけで怒鳴られてしまった。怒りっぽい女は嫌われるといつのに。

そこで急に後方のランダリードラゴンへとリアは手をかざした。

「お手本、見せてあげる」

それだけ短く呟いて、リアは目を閉じた。すると、数秒もしないうちにリアの手が緑の燐光に包まれていった。

「『ウインドカッター』……」

「ヒュヒュヒュヒュヒュ……」トリアの手から半透明の風の刃が生まれランドラゴンの群れを蹂躪した。

茶色い絨毯のなかに赤い絵の具が散った。足をやられたものはその場に崩れ落ち、踏み潰されていく。

しかし、風刃は何匹かのランドラゴンを吹き飛ばしたもの群れの勢いは微塵も衰えていない。

「おおー」  
「バカにしてるの……!?」

かすかな皮肉を込めた感嘆の声にリアは敏感に反応した。  
眉間にしわを寄せて美貌を台無しにしているリア、俺はからかい続ける気も無かつたのでそれを切り上げた。

そんな事よりも、魔法のほうが面白そうだ。

剣道一本の俺だが、剣道をやめてからはライトノベルなども読み漁つていたため憧れはあるのだ。

「リア様、ちょっと聞きたいんだけど良い?」  
「……なによ」

「魔法つかさ、イメージと魔力があれば発動できるんだよね?」

「あ、魔法を使うための第一歩だ!」

10 絶好の昼寝日和が…！？（後書き）

誤字脱字がありましたらご指摘お願いします

## 11 オリジナルマジック！ そして王都に！

「魔法つてさ、イメージと魔力があれば発動できるんだよね？」

俺の質問に、リアは少し考える素振りを見せる。

「一応… できると思うけど… 誰もやらないわよ？ スキルとして認められないトルビアナ様からの手助けを得られないから」「おーけーおーけー、それだけ聞ければ十分。ありがとな」

俺が推測するに、神様からの手助けが大きすぎる所為でこの世界の住人は挑戦することが苦手なのだ。

良く言えば規則的で綺麗な、悪く言えば型にはまつた生き方をしているのだろう。

それは俺にとつては大きなアドバンテージといえる。全く新しいスキルを作ることは、相手にとつては未知の兵器を使われるのに等しい。

俺がリアの言葉を聞いて思いついたのは、新しい魔法の創造である。幸い、魔力は足りているようだし想像力も悪くは無いと思つ。

俺は魔力を集め始める。全体の半分ほど… 光人五百人分の魔力を手に、腕に満たしていく。

そして、俺は新しい魔法の創造を始めた。

想像しよう

総てを焼き尽くす灼熱の炎を  
火よりも明るく  
炎よりもなお激しい  
其は業火…  
俺の敵を灰燼と成せ  
世界全てを焰で包め

創造しよう…

「『炎の世界』…！」

「ギヤオオオオ…！」「グアアア…！」

視界一面を真紅の炎が片端から舐めていく。  
俺の腕から魔力が一度に抜けていくのがわかつた。膨大な量の魔力  
の消費が俺にかなりの倦怠感をもたらす。

「ギヤオオオオ…！」「グアアア…！」

ランドドラゴンの断末魔の声が辺りに響いた。生きたままその体を  
炎で焼かれていく、ということは彼らにも原始的な恐怖を呼び起こ  
したらしい。しかし、その苦しみも長く続かなかつた。

魔法の威力が高すぎたために、ランドドラゴン達は灼熱の大炎に包  
まれ骨まで焼き尽くされていく。

辺り一面に肉と骨の焼ける死臭が漂つた。

「これは…きつついな…」

思わず苦笑いをする俺の足の下で、三台の馬車がその場に停車する。中からぞろぞろと冒険者たちが降りてくるが、眼前に広がる炎の海上に皆一様に目を丸くしていた。

炎はしばらくすると小さくなつていった。

炎の消えた後に残つたのはブスブスと白煙を上げながら燃り続ける焦土と、白い塵となつて風に吹き飛ばされていくランドドライゴンの骨だけだ。

「あ…いや違うんだよこれは」

弁明を始めようとした俺の頭部に、ポツリ…と何かが落ちてきた。

「？」

頭上を見上げると暗雲が立ち込めていたところだった。

当然だらう。あれだけ色々なものを燃やしたため、煙を凝結核として水滴が集まつていてるのだ。

雲ひとつ無い晴天だった空は重く淀んでいる。

「馬車の中に入つたほうがいいでしょ？」

シグントが呟くと、みんなも各自の馬車の中へと入つていく。

雨のおかげで残り火も完全に消火され、白い煙が漂うのみとなつた。馬車の中に入り腰を下ろしながら、シグントとリアの顔色を伺う。二人は、いや特にシグントが難しい顔をしながら額に手を当て、何かを考え込んでいるようであった。

ガタッ！ と先導の馬車が出発したのだろうか、馬車が走り始めた。

「…………「一ト君、さつきの魔法は何なのか教えてもらひてもいいかな？」

十分後、

「要するに…あの広範囲殲滅魔法は、君が一から創りあげた物だと  
言いたい訳ですね？ イメージと魔力さえあれば発動できるという  
リア様の言葉の裏について」

「私の所為みたいに言わないでよ…」

シグントが頭痛に耐えるような顔をしながら言つ。  
横ではリアまであきれたような表情を作つていた。

「はい… そうです…」

うつむいて答える俺に、シグントは苦笑いを浮かべる。  
まるでお手上げだ、とでも言つよう手を上に上げた。やれやれと  
首を振つて俺に優しく微笑んだ。

「大丈夫ですよ、皆には『念話』<sup>テレパティア</sup> での炎はあなたの魔力をきつか  
けにした自然魔力の暴走といつことで説明しておきましたから  
「シグントーーー！」

ヒシツ！ と俺はシグントにすがりつく。それを鬱陶しげに両手で押し戻してから、シグントは、しかし！ と続けた。

「コート君が新しいスキルを創造できるということは伏せておいたほうがいいですね」

「やっぱ？ まあ、知られても得なことは無いからいいんだが…」

「こくりと頷いてから俺は、先ほどから顕現させていた手元のスキルカードに視線を落とした。

# 『炎の世界』 レッド・カーペット

# 廣範圍殲滅型戰術級魔法

どう見ても尋常ではないレベルの内容が書かれている。広範囲殲ちゆ型戦術級魔法…噛んでしまった…。普通の光人一百人強が魔力を合わせてやつと発動できるクラスの魔法が俺には簡単に発動できてしまう。

小さな国なら簡単に滅ぼせる戦力だ。ばれたら国を擧げて狩られるか、取り込まれるかの二つに一つだろう。

「ひつかし……どうしようか……」

俺は目を瞑りながら自分の未来の選択肢を模索する。

いくつかの選択肢が脳裏に浮かんできた。

一つ目、どじかの国に仕官して悠々自適のハーレムライフ。

「二つ目、世界中を旅して自分の腕を高めていく。

二つ目、いくつもの国を全て滅ぼす、そして自分の国を造る、ついでに世界も滅ぼす。

まあ、二つ目は論外だ、世界救いに来たのに滅ぼしてどうする。一つ目は後ろ髪が引かれるものもあるが、それは諦めたほうがいいだろう。何千人もの人を虐殺させられて世界征服の道具になるのがオチだ。

そんなことを考えているうちに、疲れが溜まっていたのだろう。俺はいつのまにか眠り込んでしまっていた。

「『一ト君ー つきましたよ、起きなさい』

「むにゃむにゃ…後五分」

「起きなさいと言つてるでしょ…――――」

俺を起さないとするシグントの声に寝ぼけて応えた俺は、リアの怒声とともに馬車から引き出される。デシャーーと地面に頬をついたと同時に意識を覚醒させた俺は目

の前の光景に圧倒されてしまった。

視界の大半を占めるのは、高さ50メートルはあるつかという城壁と、莊厳な雰囲気を放つ巨大な城であった。

目を大きく見開きながら絶句する俺を満足そうに見てから、リアが得意げに胸を張った。

「すごいですよーー！ これがマドニアス王国王都『グランキャッスル』よーー！」

マドニアス王国王都『グランキャッスル』

その正体は王都全体が堅牢な守りを誇る城壁で包まれた、巨大な一つの『城』であった。



## 11 オリジナルマジック！ そして王都に！（後書き）

紅都の新魔法はいかがだったでしょうか？

俺はリアに連れられて、グランキャッスル内の宿屋『肉と野菜と料理』に宿泊していた。

明日になつたら迎えに行くから待つていなさい！ と言われてからここに叩き込まれた。

ちなみにブラックドラゴンの幼生のラックは危険度を判定するために五日ほど治安部隊の元へ。

それはともかく町のことなんて知らないから出歩くことも出来ないのそつ…と俺は寝そべっていたベッドから立ち上がった。靴を履いてから部屋のドアを開けると階段を下りていく。

一階には食堂があるので昼飯を食べに行くのだ。

「ノルハさん、昼飯ください！」  
「はいよー！」

元気の良い宿屋の女将、ノルハさんは俺の頼みを受けて料理を皿に盛りつけ始める。

それを見ながら俺はテーブルの傍の椅子に腰を下ろした。

ちなみに料金は三食飯付き一週間で小金貨一枚だ。

俺は何の気もなしに辺りを見回してみる。昼時なのでちらほらと人影が見え始めている。

「ん？」

何かトラブルのようだ。巨漢のスキンヘッドとロープを田深にかぶつた人影が言い合いをしている。

お、ノルハさんが出てきた。

「ちゅうとー 揉め事はよしとくれー。」

卷之三十一

スキンヘッドは声を荒げるとノルハさんを突き飛ばした。  
ノルハさんが持つていたサンドイッチやら何やらが床に散らばる。

てかあれ俺の昼飯じゃねーのかよ何やつてくれてんだあのハゲ

俺は怒りをあらわにスキンヘッドの元へと近づいていく。

おい！」

俺は後ろからスキンヘッドの肩を掴んでこりひを向かせる。もちろん力は手加減して、だ。

「ぐつ  
：！  
痛えな！」

スキンヘッドは上から俺を睨みつけてくる。しかしハゲに睨まれるなどブラックドラゴンの咆哮を受けることに比べればどうと言つ」とはない。

思い切り下から睨み返してやる。

「こんなところで騒ぐんじゃねーよ」「チビは引っ込んでやがれ！」

俺がわざわざ注意してやつたのにスキンヘッドは強硬な態

度を崩さない。

スキンヘッドはチッ！ と舌打ちをすると全身ローブに向を直つた。

「おら！ テメエがいつまで経つても謝らねえからめんどくせえことになつたじやねーかよ！」

再び全身ロープに悪態をつくスキンヘッド。スキンヘッドは全身ロープの胸倉を掴み上げる。

「その汚い手を私に近づけないでくださいます？ 汚れてしまいま  
す」

1

1

— なんだと ! ?

俺は全身ロープの声を聞いてわずかに眉を上げた。まさか女だとは思わなかつたのだ。

をチビとか言いいやがつてくれましたかア！？

४०

「げふつ！？」

ドゴンー といつまじい音と共にスキンヘッドの身体が吹っ飛んでいく。

ヒケヒケと痙攣しているその男の側まで歩み寄ると俺は首根っこを掴んで外へ放り投げた。

「アーネストおせじハイ」

言つてから俺は一つの思ひつきを実行する」と云ふ。

内心で悪役っぽい笑みを浮かべてから俺は千分の一ほどの魔力を片手に集めた。

想像しよう

黒き力の束縛は  
何人たりとも逃がさない  
万物を縛るその力  
我の敵を地に縛れ

創造しよう

「『<sup>グラビティ</sup> <sup>エリック</sup> 重力の戒め』」

即興で作つた闇系の束縛魔法だが、込めてる魔力が派生魔法の五倍だ。効果も強い。  
ズシン！ とスキンヘッドの周囲がわずかに歪む。重力の奔流が光をわずかに歪めているのだ。  
だが、強さで言つたら五倍ほどの重力なのでたいしたこと無いと思う。  
効果時間も十一時間ほどなので死にはしないはず。

地面とキスをし続けているスキンヘッドに一瞥をくれてから、俺は宿屋の中に入つていった。すると目の前に全身ロープが来ていた。

「どうかした」「一応お礼をしておきますわ」…うん

俺の言葉に割り込んで全身ロープが慇懃な態度をとつてくれる。だが、お礼をしてくれるというのだ。素直にもらつておこへ。

「お礼？」

「ええ、よろしいですか？」

「うん、大丈夫」

俺が全身ロープの問いに頷くと、全身ロープは俺の手を握つて引き寄せた。

全身ロープの唐突な行動に目を丸くする俺だがその先の展開にせらに目を丸くする。

ファサツと全身ロープはフードをはいで、その顔をあらわにした。

「なつ！？」

全身ロープの素顔を見て俺はまたもや絶句する。年は同じくらいだろうか。

良く通つた鼻梁に、形のいい脣、細い眉に、パツチリ一重の大きな金の瞳、そして黄金のようなその髪だ。とても美しいその顔に俺は唖然とする。

俺が驚いた次の瞬間、綺麗な顔が俺に近づく。そして、

チユツ！ と俺に頬に何かやわらかいものが触れた。

「は？」

もはや状況についていけない俺に全身ロープは柔らかく微笑んだ。一步下がつてから口を開く。

「以外にお顔のよろしい御方でしたので…印をつけさせて頂きまし  
たわ…貴方、冒険者ですわよね？ それなら武芸大会で御会い

できるかも知れませんわね「

それだけ言つて『肉と野菜と料理』から出て行つてしまつた。長い沈黙の後、俺はやつとと言つ感じで言葉を発した。

「…………なんだつたんだ……？」

謎の全身ローブ女にキスをされた後、ようやく自分を取り戻した俺はノルハさんに昼飯をもらつて自分の部屋に引き返した。

サンドイッチをたいらげてからさつきの全身ローブについて考え始めた。

変なこと考えるなよ読者の諸君！ 別にキスのことを思い出していたわけではないのだ。

…何言つてるんだろう俺。

まあいい、俺が考えていたのは武芸大会と言つ言葉のことだ。最近は魔法も使つてるので忘れられているかも知れないが、俺は剣士である。もう一度言つが俺は剣士である。大事なことだから二回言いました。

まあ、分類としては魔法剣士にでもなるのかもしれないが、俺としての本質は剣士のままだ。

#### 閑話休題

武芸大会とやらに参加したい気持ちもあるが…正直俺の能力は強すぎる。

どんなチートだとたまに叫びたくなるぐらいだ。

この力がある限り優勝は確実だろう。そんなの全然面白くないし、俺の技術の向上にも繋がらない。

シグントの話では常時発動型のスキルは効果の切り替えが出来ないらしい。

ところへ、何かの魔法具とかで力を弱めるしかなれやうだが……

「どうしようかなあ……」

俺が考え事を始めようとすると部屋のドアを誰かがノンノン…と叩いた。

俺はいったん思考を中断し、ドアに向かつて声をかける。

「どーぞーー！」

「入るわよ？』

ドアを開けて入ってきたのはリアだった。

長い黒髪を、今日は頭の後ろで束ねている。いわゆるポーテールとか言う奴だ。

リアは抱えていた紙袋の中から何かを取り出した。それは一枚の紙と羽ペン、それに黒いインク瓶だ。

「何？ それ

「これはギルドに申請する書類つて

何よそれー！？！？

途中で俺の顔を見た途端にリアが顔色を変える。

最初は白磁のような白、それから赤くなつていつて最後には蒼白になつていった。

その代わり様に俺は冷や汗を流す。

「…………どうかしたんでしょうか？」

「アンタ……！ その顔のキスマークはなんなのよ……！」

「……は？」

リアの指摘に驚いて俺は部屋に備え付けられている鏡の前にすつ飛

んでいく。

「ザツ……」

俺の頬にはピンク色の口紅の跡が残っていた。おそらく先ほどの全身ロープにつけられたのだろう。やつを言われた『印』についてのことか！ と心の中で叫ぶ。

俺は慌てて「じい」と袖でぬぐつた。

それからリアのまつを振り向くと、リアはフルフルとうつむきながら震えていた。

「私には関係ない私には関係ない私には関係ない……」

ぶつぶつと怨嗟のよくなものを呟いていた。まじで怖い。

「何でもないよ……なんか知らない女を助けたらお礼とか何とか言われてされただけだから」

「私には関係ないって言つてるでしょ…… 良いからやつたとこれに署名しなさい……！」

「わふっ……」

リアが俺の顔に紙を押し付けてくる。

俺はそれを引き剥がして中を覗き込んでみる。

「………… 読めない」

また問題が一つ発生してしまった。俺はアーバニアの文字が読めない。

何とかして読むかと画策する。

(どうかねえうかるー…? 魔法を作るか? でもどんな魔

法なのかわからない。いや待てよ？ 属性じゃなくて目的を主題において作ってみたらどうだ？）

ピンチを切り抜けるために俺は頭を高速回転させて簡単な魔法を作る。魔力は3ぐらいを消費しておく。総魔力量の五千分の一だ。そして、その魔力を材料に俺は早速、新魔法の創造を開始した。

### 想像しよう

全ての言葉を解し  
全ての文字を解し  
全ての言葉を用い  
全ての文字を用いる

### 創造しよう

「『言語解説』  
パーソナルランゲージ

魔法を使ってからもう一度書類を覗き込んでみる。

### 冒険者ギルド登録申請書

この書類は冒険者ギルドの申請に際して、登録用紙と、登録についての注意事項を記した書類です。

良くお読みください。

## 注意事項

当ギルドは、加入者側に一切の過失が無く、ギルドの側にのみ過失がある場合以外では一切の責任を負いません。

当ギルドは、クエスト中に起こった事故、負傷、死亡に關して一切の責任を負いません。

当ギルドは、冒險者同士のトラブルで起こった損害などに對して一切の責任を負いません。

「……ギルド責任逃ればっかだな

俺は苦笑いしながら呟く。そのまま流し読みしていくと書類の最後に名前を記入する場所があった。

俺は羽ペンをインクに浸すと一応リアに確認しておぐ。

「ここに名前書けばいい?」

「……そつよ」

なぜかまだリアは怒りを収めてなかつたが、俺は羽ペンを使って名前を書いていく。

羽ペンを使うのは初めてだったが、意外とそういう書けたのに驚く。

「これで良し……と。後はこれをギルドに提出すればいいんだよね?」

「ねえ……登録終わったらアンタ……ちょっと買い物に付き合ってなさい……！」

「……良いけど」

なんで買い物につき合わされるのかはわからなかつたが荷物持ちとかそんなところだつた。

それで、機嫌を直してくれるなら、と俺は了承する。結局のところそれは正解だつたようだリアは俺が頷いた瞬間に笑顔を取り戻していた。

「それじゃさっそく行くわよ！」

腰に刀を差し、リアに手を引かれて俺は宿屋から冒険者ギルドへと向かつた。

「あつちが武器屋、こつちが防具屋、それであそこが魔法具屋ね

道中、リアから町についての説明を受けながらギルドへと向かつ。宿屋から二十分ほど歩いた場所にそれはあつた。

「でかいな……」「当たり前でしょ

俺はギルドを見上げて感嘆の声をもらす。

赤みがかつた木と石で出来た建物は十分に歴史の重みを感じさせる。

俺はリアを伴いながら大きな扉を開いて中に入った。

瞬間、俺とリアに中にいた冒険者たちの視線が集まった。

品定めするような視線が俺たちに浴びせかけられる。しかし、リアはそれを気にする風も無く先に歩いていこうとした。

俺も他の冒険者たちの姿を観察するのを後回しにしてリアについていく。

「リリアが受付よ、ちやつちやと済ませなさいー。」

俺はリアに言われるままにカウンターに足を運ぶ。そして受付のお姉さんに紙を提出した。

「えっと、新規の登録お願いします」

「はい、スキルカードをお出しになつてお待ちくださいー！」

お姉さんはにこやかに俺に対応するとカウンターの奥に引っ込んでしまった。

俺はスキルカードを取り出すとそれを覗き込んでみた。

フジリヤ ノウト

所有スキル

『神速神武』『竜断ち』『炎の世界』『重力の戒め』『完全言語』

レジド カーベット グラビティ パーフェクトランゲージ

『竜鱗』『竜力』『竜心』

称号

『竜殺し』『技能の作り手』

スキル ジェネシス

「なんか増えてるなー」

半分呆れながら呟いているとお姉さんが半透明な球体を持って奥から出てきた。

「スキルカードをここに置いてください」

「はい」

短く返事をしてから球体にスキルカードを触れさせた。感覚で言つならスイカとかバスモとかと同じ感じで。球体は一瞬光った後もとの状態に戻った。

これで終わりだろうか、と俺はお姉さんを見る。すると、お姉さんはにこりと笑つて、

「登録は完了です。よひこそ、新しい冒険者さん」

ギルドのお姉さんに別れを告げて、俺は今リアの買い物に。  
とこりか舐めていた…舐めすぎていた、女の子の買い物に付き合つ  
といつ高難易度ミッショソを…。

さつき下着店に入った時など周囲の視線が痛すぎて本当に死にたく  
なつた。ちなみに女性用の下着を売っているのはマドミス王国だけ  
らしい。

持たされた荷物の高さは俺の身長など優に超える。  
それを一旦休憩ね、とかなんとか言つて俺の部屋に放り込むのはど  
うかと思つ。

なんやかんやで一時間ほど買い物に付き合つた後に、最後の場所と  
言われて魔法具屋まで来たのであった。

「なんかアヤシー」  
「普通よこのへり」

俺も気後れしながらドアを開けて中に入る。

ドアを開けた先に広がっていたのは中々に広く薄暗くて煙っぽい空間であった。

壁にはロープのようなものが掛けられ、棚には水晶玉が置いてあった。他にも指輪やらネックレスやらの装飾品が所狭しと並べられている。

店の奥にはおじこさんが畳を瞑つて座っていた。

「リア様、何を買つに来たの？」

こんな怪しい場所に何の用だらつ？ と疑問を覚えた俺はリアの背中に声を掛ける。

リアは棚に置いてある指輪を取つてじろじろと見ていた。

「シグントから言われたのよ。アンタの力を弱める魔法具を用意しなくちゃいけないって。でも…『竜殺し』の力を弱める魔法具なんであるのかしら？」

「へー…、そうだ！ リア様！ なんか俺にいい指輪見繕つてよ

俺は魔法具が無いのなら自分で装飾品に『呪い』を掛ければ良いのではないかと思いつく。

前にシグントからダンジョンの奥とかで見つかるアイテムには『呪い』というステータスを下げる魔法が掛かっていると聞いていたのを思い出したのだ。

リアは不思議そうな顔をしながら俺の頼みを了承して、棚の中から一つの指輪を持ってきてくれた。銀のリングに青い宝石のはまつた指輪、かなり綺麗だ。

リングの外側には薄く紋章のようなもの掘りこまれている。

「れなんど「」?

「…いいね、リア様つて意外とセンス良いんだね？」

「意外とつて何よ！」

二宮山房集卷之二

それに苦笑しながら俺はそれを店の奥にこじりつけからピクつとも

俺が声を掛けぬとおじこれをせりへつと顔を上げ、俺を見据えた。  
そして、

パンッ！！！ と大きな破裂音を立てておじいさんの頭が破裂した。 中からは何か赤いものが飛び散る。

「ハア！？！？！？！？」

俺は素つ頓狂な声を上げて目を丸くする。  
思わず尻餅をついてしまった。

「…これは…羽毛？」

俺は慌てて周囲の赤いもの全てを確認する。  
「どれもこれも羽毛だ」赤い羽毛。

「……………リア様？」

俺は恨みがましくリアを見る。

リアは腹を抱えて笑い転げていた。そんなリアに羽毛を投げつけてからおじいさんだつものの頭部を確認する。

「…………からっぽ」

俺はこの店を消し去るうと魔力を右手に集めていく。全魔力の九割ほどを使う、『炎の世界』程の範囲は必要ない。あれの千分の一ほどの範囲、その代わりに火力を極限まで上昇させていく。俺の知る限りの最高の火力、太陽と同じレベルにまで。創り出す魔法は完成した。

「『灼熱地獄の大炎柱』…………！」

俺は慌てて魔法の発動をキャンセルする。

おつとイカソイカソ！ 怒りに任せてこの首都を消し飛ばしてしまったところだった。誰かに待つたをかけられなければヤバかったかも知れん。

ん？ 誰が俺に待つて言つたんだ？

あの声はリアじやないぞ。低くてしゃがれたじじいの様な……。

「誰だ？」

「そう怒らんでくれよ……」

「トロイさん！ 久しぶり！」

ため息をつきながらさつきのおじいさん人形が座っていた扉の奥から、リアにトロイと呼ばれた一人のじいさんが出てきた。首元にかけている大きなネットクレスが目を引く。

「まさかあの悪戯でここを吹き飛ばされるほどの魔力を集める奴がいるとは思わんかったわい」

ふいーー ヒ、額に浮かべた汗を拭いながらトロイは呻く。

「「うぬせこな…ジジイがからかうのが悪いんだろーが…」

「ドッキリやられたので呼び方はジジイで。

俺は眉を潜めながら吐き捨てる呑み物に咳こた。リアはまだ後ろで笑つている。

その場の空気を変えるために、トロイに指輪を突き出した。

「これ、こくらだ?」

「「む…タダで良いじゃん」

「……何考えてやがる?」

疑り深い視線を向けながら俺はトロイを見る。

トロイは、ほつほつほつーーと笑いながら首をゆるゆると揺りす。

「その気持ち悪い動きはやめる。…まあれるこなら貰つておぐが  
「さつきの詫びじやよ、それと…」

トロイはそう言つてから、品物が置いてあるスペースに立たせたと  
歩いていく。酒を飲んでるんだろうか。息が酒臭かった。千鳥足だ  
し田が虚ろだ。

四、五歩進むとトロイは置いてある棚の一つに突っ込んだ。  
ガシャーンーーと軋やかな音が店内に響く。

「…大丈夫か? ジジイ

「…ぬ、問題なしじや…」

トロイはジンジンのようになぶれた棚から這い上がる。

その手には何かが握られている。大きさは…ライターぐらいだらうか、緑色をしている。

トロイはそれを俺に向かつて放ってきた。

俺はそれを空中で受け止める。まじまじと眺めてみると透明な…ガラスのような透明な石で出来ていた。

「なんだ? これ

「 McConnellにしてもらつたための小道具、じゃよ

ほほほ…と笑つてトロイは奥へ引っ込んでしまつた。ようやく笑うのをやめたリアが俺の肩を叩く。

「あのおじこさん、人をからかうのが趣味なのよ。笑つとけばいいの。」

無料で色々くれるしね、と続けてからリアは俺の手を引いて店の外へと向かう。

しかしその途中で何かを思い出したかのよう俺に向き直つた。

「そういえば、さつき何もらつたの?」「ん? これだけ? なんだろこれ?」

俺はリアに緑色の石を差し出す。

リアはそれをチラリと見て、興味なさそつに視線を外したかと思つと次の瞬間、

「それ…『風の精霊結晶』じゃない!…『ウインド クリスタル

と、叫んで俺の手から強引に石をもぎ取つた。

俺はその行動に唖然とするしかない。やつとのことで声帯を震わせ

る。

「あの、リア様？ それ俺のなんスけど…」

なんか興奮していのよつたリアに半ば引き気味になりながら俺は声をかけた。

「何言つてんのよ！ これは私が貰うに決まつてんでしょう…！…！…！  
「暴君じやねーか…！ 落ち着けよリア…！…！」

「…リア…！…？」

しまつた！ 様付けんの忘れたー！ でも俺悪くなくね？ とガクブルと身体を震わせる俺だが、リアのお叱りを受けめこと無かつた。リアは顔を真つ赤にすると俺の顔を下から上皿遣いで見つめてくる。やべ、なにこれマジで可愛い。

「リアで…こいわよ…！…！」

「え？」

「だから… 様付けなくって良いつて言つてんの…！…！」

リアが顔を真つ赤にして叫んだ。

それに俺は笑顔で返した。

「分かつた、リア。これからもよろしくなー！」

「ツ…！… これ返す…！」

リアは精霊結晶？ とやらを俺に放ってきた。

それを俺は慌てて受け止める。てかさつきから誰も普通に渡さないよな…。放つたりもぎ取つたり放つたり。

「…精霊結晶つて何？」

俺はトロイから貰つた精霊結晶がどんな物なのか気になってリアに聞いてみることにした。

「精霊結晶つてのはその名の通り精霊が固まって出来た結晶よ。砕けば精霊の力を利用して一時的に凄まじいほどの力行使できるわ。それは風の精霊結晶だから…風の神人しんじんと同じくらいの力かしらね？」

「しんじん？」

聞きなれない言葉が聞こえたので聞き返す。

ていうか精霊結晶す、そつだな…俺には必要ないかも知れないけど。

「神の人よ。魔力の保有量は子供ですらワソクを遙かに凌駕するわ」

「…無敵じゃん！」

「そうでもないわ、神人は一人に一つの属性しか使えないから反属性ばかり使う高位魔人を沢山集めたら倒せるかも知れない」

「ふーん」

そのような感じの会話をしてから俺はリアと別れた。

リアは明日は用事があるので明後日の正午に『肉と野菜と料理』の前で待ち合わせすることにした。

部屋に戻つてから『呪い』を指輪にかけようと思い、俺は歩き始めた。

すると、風が吹いて一枚の紙片が俺の前に飛ばされてきた。

「お?」

それは何か文字が書かれたチラシのようなものだった。

「『パーフェクトランゲージ  
完全言語』」

と、詠唱してからもう一度覗き込んでみると

武芸大会開催!!

風の四十日目にグランキャッスル中央の王城前で武芸大会が開かれます!!

腕に自身のある方はぜひ御越し下さいませ!!

当曰参加お待ちしております!

武芸大会実行会より

と書かれていた。

今は風の三十一日だから、後一週間ほどで開催されるのかね? と  
俺は計算してからそのチラシをポケットに突っ込んで、『肉と野菜  
と料理』へと向かった。

『肉と野菜と料理』俺の部屋

さて、それでは創造を始めるとするか。  
ちなみに荷物は全て無くなっていた。リアとシグントが取りに来た  
らしい。つてことは荷物持ちやらされたんだろうなシグント。

テーブルの上に指輪を置いて、俺は魔法で『呪い』を創り出そうす  
る。

魔力は付与し続けないといけないから… 30くらいやつとくか。

想像しよう

物に宿りしその力  
全ての力を弱らせん  
其を身につけし強者には  
力を鎮め弱らせる

創造しよう

『弱体化付』<sup>デバフエンチャント</sup>！

なんか濁つた色の光が俺の手から指輪へと注ぎ込まれた。

指輪自体の見た目は変わっていないが、効果はどうなんだろうか。  
俺は指輪を手に取ると、右手の人差し指にすっぽりとはめる。  
途端に全身から力が抜け、倦怠感が俺を襲った。

「…あー…成功かな?」

俺は効果を確かめるために腰の刀を抜く。  
振つてみようと思ったのだ。しかし、

「なつ！？！？」

俺は刀を鞘から抜いた次の瞬間、そのとんでもない重さに驚愕し床に取り落とした。

ガシャツ！ と刀が床とぶつかって音を立てる。

「んだこれ…やっぱ重くなつてね？ …確かめてみるか

俺はそれを確かめるために、鑑定するためのスキルを創造し始める。

想像しよう

其は全てのモノの価値を見る  
其は全てのモノの名前を知る  
其は全てのモノの能力を知る

創造しよう

「『<sup>スキルアイ</sup>観察眼』」

俺はスキルを発動してからもう一度刀を見てみる。  
すると、視界にはゲームのように刀の名前や能力が現れた。

名称  
『神刀 魂喰』<sup>イタ</sup>

能力

『斬ったモノの力を吸収する。強いものを斬れば斬るほど重さと切れ味が上昇していく、鞘に収まっている間は通常のまま』

「そーゆうことね…、つたく力弱めたら振れもしないとか…どんなだよ！」

俺はため息をつくが、明日のうちに武器屋にでも行って剣を買おうと思いつ立つ。

リアは刀を知らなかつたから、この世界では広まつていなか、マイナーなのかのどちらかだらう。

西洋剣にも興味があるしいい機会だ、と俺はポジティブシンキングしてからスキルカードを確認する。力が弱まつた状態でのステータスが気になつたのだ

フジミヤ ロウト

魔力	筋力
体力	魔力
敏捷力	体力
物理耐性	敏捷力
魔法耐性	物理耐性

所有スキル数 11

「こんなもんかな…」

俺はうんうんと頷きながら満足げにスキルカードを消す。

筋力と体力と敏捷力は鍛えていたからそれなりに高い、他のはまあ、妥当だろ？。

俺はニヤリと口角を吊り上げる。

「これで……技術を高められる……！」

俺の目指すべき場所である最強の剣士、そのために必要な課題の一つはクリアした。

力や魔力ではトップクラスらしいから残りは技術だ。

それを武芸大会で高められるだろう。

力強く咳いて、俺は晩飯を食べるためには階下へと向かった。

翌日

俺は、昨日リアが言つていた武器屋に向かうこととした。

『弱体化付与』した指輪、『ブルータス』を着けて、刀…もとい魂<sup>イ</sup>タ…

槍を腰に差す。

鞘に納まっている間、重さは変わらないので問題ない。それと『プラ

ックドラゴンの鱗も数枚持つて行く。

俺は『肉と野菜と料理』を出ると石畳の街道を歩いて武器屋へと足を進めた。

二、三分ぶらぶらと歩いていると、視界の端に金槌と剣のエンブレムが施された看板を見つけた。

俺は見覚えのあるそのマークの前で立ち止まる。

「たしか…ここだつたよな?」

呴いてから、俺は金属で縁取られた木製のドアを押し開ける。中に足を踏み入れた俺だが、

「…誰も…いない?」

店内には武器が所狭しと並べられていた。

壁にはハルバードからスピアなどの長物から「」などの飛び道具にクレイモアなどの大剣まで、棚の中にはダガー やショートソードが並べられていた。

店の奥のほうには机と椅子が置いてある。しかし、人の姿が見当たらなかつた。

「あのーすいませーん！ 誰かいませんかー？」

俺は店の奥にまで聞こえるように声を張り上げる。ふと思うのだが、なぜ人は遠くに呼びかけるときに語尾が伸びるのだろう。どうでもいいが。

声を掛けてから三十秒ほど入り口付近で固まっていると入り口の反対側にある扉が白煙と共に轟音を立てて開く。それはまるで中で爆発物が炸裂したかのようだつた。

そして白煙の中からゴホゴホと咳き込みながら歩いてくる人影が一

つ。

「けほけほ！ 大成功よ！－！」

そのシルエットは何か棒のようなもの振り回して喜んでいるようだ。俺は戸惑いながらもそのシルエットとの接触を試みる。

「あの… 剣がほしいんですけど…」

「客ー？」

俺の呼びかけに人影は首をグルン！ とこちらに向ける。

そしてその動きで煙が晴れ、シルエットの姿があらわになつた。

「（…女！？）」

俺は心中で大声を上げる。昨日の全身ロープ女に匹敵するほどの驚きが俺の全身を駆け巡った。

それは女であるだけではなく、全身ロープ女とはまた違う意味で美人であった。

年は二十に届くか届かないかといったところだらう。

健康的な小麦色の肌に薫色の髪、よく通つた鼻に薄い唇。そして印象的な力強い瞳。全体的に程よく筋肉のついた体。

そして一番目を引くのは、タンクトップのような服を大きく押し上げるその胸だ。

「…巨乳…」

「? どうかした? お密やん

「いやいやなんでもないです!!」

しまつた…思わず胸を凝視してしまつた。俺は慌てて首を振る。そんな俺を不思議そうに眺めるシリエット、じやなくて鍛冶屋さん。ふと、鍛冶屋さんの右手に握られている物に視線が向けられる。それは刀身の中に赤い… クリスタル精霊結晶みたいな半透明な石が嵌め込まれたダガーであった。

「いや…なんでもなくないよね? 何かお求めかな?」

俺は鍛冶屋さんに呼びかけられて、ハツ! と現実に意識を向けた。元気な鍛冶屋さんに「まかすよ! あはは…」と笑つてから口を開く。

「武器…剣が欲しいんですけど  
「剣? どんなのが好みかな?」

そう言いながら鍛冶屋さんは手にしていたダガーを机の上に載せる  
と棚の中から様々な剣を取り出した。  
ガチャガチャと音を立てながら店の中の端にあつた台に剣が乗せら  
れていく。

片手用の直剣からショートソードに湾曲したシミター、ツーハンド  
ソードと長大なクレイモア。

どれも刃から光沢のある銀色の光を放っているが… どれがいいのか  
はよく分からない。鋼鉄を溶かして造る铸造の剣は見たことも握つ  
たこともないのだ。

刀などの鍛造で作るものにはそれなりの知識があるのだが…。

俺が顎に手を当てて考え込んでいると鍛冶屋さんが話しかけてくる。

「ねえ、お客様さん」

「なんですか？」

振り向かずに、武器を一つ手にとつて眺めながら応える。

俺が持つたのは反りのない両刃の直剣だ。刃も乱れなく綺麗にそろ  
つていて。流石に波紋などは浮いていないが上物である。

そんな俺を面白そうに見ながら鍛冶屋さんは俺の腰にある魂喰を指  
差した。

「その剣、悪くなつてゐるなら研ぎ直してあげようか？ そつちのほ  
うが安いよ」

「え？」

一度聞き返してから俺は得心する。

わざわざ剣を持っているのに新しいのを買いに来たため、今使つて  
いるのが壊れたと勘違いしたのだろう。

俺は首を横に振つて問題がないことをアピールする。

「これは壊れてるとかそんなんじゃないですよ」

「やうなの？ ジャあ何で新しい剣が欲しくなったのかな？」

「ちょっと事情がありまして…」

まさか自分で造ったブルータスを嵌めたら振れなくなつた、と言つ  
訳にもいかないので適当にお茶を濁しておく。眺めていた直剣を置  
くと今度はクレイモアを手に取つた。

「鍛冶屋さん、名前なんて言つんですか？」

「リーナだよ、君は？」

「『』一いつ呼んでください」

などと会話を続けながら俺は棚に置かれた刀剣を見ていくが、何か  
しつくりと来ない。

俺は手にしていたシミターをそつと棚の上に置くと、鍛冶屋さん…  
じやなくてリーナの方を向く。

「剣つてここにあるのですか？」

「一応ね、お気に召さなかつたかな？」

「なんかしつくり来なくて…」

そこで、俺は机の上に置かれている石のはまつたダガーを指差した。  
特に理由もなく、あえて言えばまたま、ダガーが視界の中に入つ  
てきたからそうしただけだった。

「そついえば、そのダガー…なんで精霊結晶がはまつていいんです  
か？」

「これが精霊結晶だつてわかるのつー? ノート君ー!」

昨日、トロイから貰つた精霊結晶と色は違うが何処か同種の雰囲気を放つていたので聞いてみたが、どうやら正解だつたようだ。リーナは俺に指摘されたからか突如、嬉々としてダガーのことをしゃべり始めた。

「このダガーはただのダガーじゃないのよー!」

「はあ」

「何せ刀身に『火の精霊結晶<sup>ファイア クリスタル</sup>』を鍊金で埋め込んだ特別製なんだからー!」

「ほう」

「これによつてこれから精霊結晶の使い方は劇的に変化するのよー!」

「なぜ?」

「精霊結晶を壊して一時的に能力を上げるなんて邪道だわー! せつかく属性を制御するのに最適な精霊たちがいるのにそれを利用しないなんてー!」

「ふむ」

「私の作ったこのダガーは柄と刀身の部分に魔力を通しやすいミスリル鋼を使うことにより、精霊結晶への魔力供給が可能になつたのよー!」

これにより、と続けてからリーナは目を瞑つて精霊結晶のはまつたダガーを水平に構える。

「見てて…」

短く呟いたかと思うと次の瞬間、ボウッ!! とダガーにはめられた精霊結晶から炎が溢れ出す。

それは俺が見ている前でどんどん形を集束させていき、やがてダガーの延長線上に1メートルほどの炎の刀身が現れた。リーナは田を開けてそれを満足そうに見てから俺に得意げな視線を送つてくる。

「すういな…」

俺はパチパチと両手を打ち合わせながら感嘆の声を上げた。リーナは炎を引っ込めるダガーを傍らに置く。

「精霊結晶はこんな使い方も出来るんだよっーー！」

大きな胸を張つてドヤ顔を作るリーナにも拍手を送つてから俺はポケットに入れっぱなしだつた風の精霊結晶のことを思い出した。『そ、そと。ポケットをまさぐつてそれを取り出す。

「わおっ！ 精霊結晶じゃん！」

「リーナさん、この精霊結晶でも同じことって出来ますか？」

リーナは俺の手にある精霊結晶を興味深そうに見て、首を縦に振つて何事かを口にする。

「この精霊結晶の純度ならこれよりも良いやつができるかも…、コート君！」

リーナは俺の腕をガツシリと握つて俺を見上げてくる。

雰囲気の所為で長身に見えた彼女だが実際は百六十後半くらいだろう。動きの反動で豊かな胸が、たゆん…！ と揺れた。

俺は胸をガン見しないように気をつけながら脳内メモリーにはちやつかりとその光景を保存しておく。

リーナが熱い目で下から俺を見てくれる。  
その上目遣いをしてくるリーナの姿は、リアとは別種の可憐さがあった。

俺はそこでリーナとリアって名前が似てるなーなどと、とつともなく関係ないことをふと考える。

そんな俺にリーナは、

「私に武器を作らせてくれないかな！－？」

「へ？」

俺は胸に気を取られていたせいで間抜けな返事しかすることができなかつた。

## 16 僕への刺客！？（前書き）

前の話、最後の部分などかなり付け足しました。

一度読み返してもらえるとうれしいです^ ^

あと『12 謎の美少女』の最初に付け足しましたが、ブラックドラゴンのラック君は王都の治安部隊の元で危険度の査定を受けています^ ^

三話ぐらい後から復活しマース

## 16 僕への刺客！？

ヒュンヒュンヒュンッ！ ボウガンから放たれた矢が唸りを上げて、

裏路地イタを走る俺へと向かってくる。

俺は魂喰イタを三度閃かせ、その全てを叩き落した。

「チツ！」

ブルータスはとっくに外してあり、俺の能力は開放されている。

俺は舌打ちをしながら、石畳を踏み碎かんばかりに蹴り抜いて再び走り出す。

「リーナさん… 無事だといいけど」

咳くと、曲がり角から子供の手を引いた婦人が現れ、俺は急ブレーキを掛けた一人の前で急停止した。

驚いた顔をする婦人に一度会釈してから俺は走り出そうとする。しかし、チャキ… という金属的な音が背後から聞こえ、何かが背に肉薄する気配があつた。

「…ツ！？」

俺は走り出そうとする勢いそのままに右足を軸にして振り向いた。背に迫っていたナイフを握る婦人の手に、ショートフックを打ち込んでナイフごと吹き飛ばす。

手加減はしなかつたので婦人の骨の碎ける感触が俺の手に伝わる。しかし、婦人…もとい暗殺、ギルドの構成員の顔には苦痛の表情は浮かばなかつた。

「つむつー？」

今度は子供がエストック…だろうか刺突剣を俺に突き出してきた。西洋剣の名前と形状、使い方だけは知つてゐるが、如何せん良し悪しが分からぬのにもどかしさを感じる。

慌てて飛び退ると子供の腹を蹴り上げて氣絶させた。

崩れ落ちる子供を見ながら婦人のこめかみをけり抜くと俺は呆れて呟いた。

「怖…、こんな子供まで暗殺者なのかよ…」

時は二十分前まで遡る。

「私に武器を作らせてくれないかな？」

-  
^  
?  
└

間抜けな声を上げた後で頭がリーナの言葉を数秒遅れで理解する。俺は慌ててぶんぶんと首を縦に振った。

「いいんですか？」  
「もちろん！ 精霊結晶は貴重だから全然手に入らないんだよねー、  
だからゴート君が持つてくれたら私の腕も上がるんだーー。」  
「へー、それならお願いしてもいいですか？」  
「もっちらん！」

リーナは満面の笑みを浮かべてから、一度店の奥へと引っ込んだ。少しの間、待ちぼうけを喰らつた俺だが、リーナは数個の金属のインゴットを抱えて戻ってきた。

「どれがいい？　ミスリルにアダマンタイト、オリハルコン…貴重な聖金属はこれぐらいしかないけど…、どんな形状がいいかな？」

ପ୍ରକାଶନ ପରିଷଦ୍ୟ

書き始めた。

「…こんな感じかしら？」

どうやら紙に書いていたのは俺が希望した剣の形状だった。

リーナが俺に見せてくれた紙には片手用の直剣を片刃にして短くしたようなものだつた。

「えつと…、刀身を長く出来ませんか?」

俺の要望に、リーナは複雑そうな表情を見せた。

「長く? 出来ないことはないけど… お金掛かっちゃうよ?」

そういうことかと俺は納得した。

俺は鎧もつけていないどう見ても駆け出しの冒険者だ。リーナが金の心配をするのは分かる。

「ちなみに… おいくらですか?」

「うーん…、大金貨六枚… つてところかしらね」

大金貨… 六枚って言つと六百万円か? お高いねえ聖金属つてのは。そんなことを考えながら、俺は布に包まれた『黒竜の鱗』を取り出して、リアに差し出した。持ってきた鱗は八枚、相場に換算すると小金貨六十四枚、大金貨六枚分はある。

「これで足りるかな?」

「これは… 鱗? … この手触り… 光沢… まさか『黒竜の鱗』! ?」

「代金ぶんの価値はあると思うけど?」

「十分よ…! さっそく作り始めるわ! 長さはそれと同じくらいで良い?」

俺の腰の魂喰イタを指差してリーナは俺に確認した。

俺が首を縦に振るのを見るとリーナはインゴットを抱えて店の奥へと行つてしまつた。

「作るところが見たいならついてきて」

と並んで、奥がどんなになつてこのか気になつて俺はついていくことにする。

「おおー！」

# 「私の自慢の工房よ！」

すごいでしょー、とリーナが自慢を始めたところで俺の脳内で声が響く。

{「——今『」に——るの——?」}  
「く? …ああ、『念話』か、どうした? リア」

だから今どこ！？

今 錫治屋はしてにと  
設営屋

「知つ會」？ 意外ジヤー

「なんでよ！ ていうか今ま

「獨立の精神をもつて」

リアの言葉に俺は語氣を強めようとするが、それはリアの次の言葉にさえぎられる。

「アンタ、暗殺ギルドに狙われてる！－！」

「……は？」

「だから今すぐあたしの家に来て…… 場所はそこから北西に真つ

直ぐ！ 一番田立つ大きな家！」

「…わかった、今行く」

俺が返事するとリアは念話を切ったようだ、何の声も聞こえなくなつた。

一応、リーナに声をかけてから出るににする。

「あー、リーナさん。今日のよつと用事出来ちゃつたんで帰ります

！」

「うん？ わかった」

「じゃあ明後日あたりにまた来るんでー！」

インゴットを熱し始めているリーナに声をかけて、俺は鍛冶屋の外に出た。

北西つて…向こうか？ と歩き始めよつとしたところで後ろから俺に声がかけられた。

「すいません、道をお聞きしたいのですが

「はい？」

杖を突いた優しそうな老紳士が俺の背後にいた。

急がないといけないらしいが道を知らないと断りを入れるくらいならいいだろう。

俺は口を開こうとするが、老紳士は片手を上げてそれを制す。老紳士は杖の柄を握ると左右に大きく伸ばした。

「教えていただきたいのは…………死後への世界です！」  
「なつ！？」

老紳士のステッキから白銀の光がこぼれた。

杖の中に武器を仕込む。

俺は昔の忍者も使っていたその武器に心当たりがあった。

「…仕込み杖か！…？」

俺は腰の剣帯から鞘<sup>イタ</sup>ごと魂喰<sup>イタ</sup>を抜いて老紳士の横なぎの剣撃を防ぐ。ステッキの柄から伸びる細い刀身はガツッ！と黒い鞘に受け止められる。

「暗殺<sup>イタ</sup>ギルドか！？」

「そこまで知っていたか…」

老紳士の眼光が強くなり、口調が変化する。

一度、俺から離れると仕込み杖を振りかぶつて切りかかってきた。

「クソッ！」

悪態をついてからブルータスを外し、俺は魂喰<sup>イタ</sup>を抜き放つ。

ドガッ！ と向かってくる老紳士を剣<sup>イタ</sup>ごと叩き潰す。もちろん峰打ちだが、ドラゴン並みの筋力で叩きつけたために骨の何本かは折れているだろう。

俺は急いでリアの元へ向かうべく急いで走り出した。

現在、

「あそこか？」

暗殺ギルドの婦人と子供を倒した俺はそれから程なくして、視界内に大きな屋敷を收めていた。

俺は正門はどこだろうと探し始める。

きょろきょろと辺りを見回す俺に声がかけられた。

「コート君！ いらっしゃい！」

17 決闘！？俺 VS 第二ヒヒチ(の代理)---(前書き)

更新遅くなつてすみません汗

さて、こんなにちは。藤宮 紅都こうとです。

今、俺はシグントに屋敷の裏門前で呼び止められ何処かへと案内されている途中だ。

無駄に豪華な廊下をシグントともに歩きながら執事のような服の背中に声をかける。

「シグント…、俺はなんで呼ばれたのかを知りたいなー！」  
「もう少しです」

特に理由を説明されることもないままここに連れて来られた。しかもシグントは「じきにわかります」の一点張りで何も言おうとしない。

いい加減フラストレー・ショーンが溜まつて来たなーと俺が直覺し始めたところで、シグントが一つの扉の前で立ち止まる。金と銀で装飾が施された大きな扉だ。

「話を合わせてくださいね？」

俺に小さく耳打ちしながら、重厚な造りのその扉をノンノンとノックしてから、シグントは両手で押し開けた。

次の瞬間、俺はその言葉の意味と、リアが洞窟を出発する時に言っていた「本当に王都に来ていの？」という言葉の真相を理解した。

「 そういうえば一話ぐらい後に言葉の意味が分かるとか書いといでここまで分からなかつたな。申し訳ない。」

俺が見ている前で扉が開き、シグントは中に向かって声をかけた。

「夫兄様です。ナナミ様、第三王子殿。リア様の體調を考慮へ故

しました。よひしげじょうか

## 意外と早かつたな、入れ上

シグントの声にカツ「良さげな男声が聞こえた。

「んな、  
まさか！  
リアの婚約者がここにいるのか？  
でも俺の他には誰もいな  
ん？」

俺の不安は的中する。

シグントは中に足を踏み入れると俺の方に手を向けながら言った。

「冒険者のフジミヤ様。かなり以前からリア様とは交際なされていたようです」

何言つてんだシグントオオオオ！――！――！――！ と、俺は脳内で叫びたくなるのを錆のような精神力で抑えると、中に足を踏み入れ、豪華な部屋の中に視線をめぐらせた。

俺が婚約者ってことは、リアが誰かと結婚しなくてはいけないからそれを防ぐために協力して欲しい、とかそんなところだろう。俺は自分の推理力を総動員して答えを導き出した。

た壯年の男性。

それとやたらキラキラした服を着た二十代前半くらいの太った男とその後ろに立つ無表情な男だ。

俺はシグントが何かしら言うのだからと待っていたが、一向にその気配がないことに冷や汗を流す。

「フジミヤ様、ナナド様と第三王子殿に」挨拶を

予想通りだつた。リアは部屋の隅でこちらを見つめてくる。シグントが俺を促して誰かに挨拶をさせたいようだ。とりあえず、部屋の中で一番年をとつていそうな男性から挨拶をすることにした。

「」紹介に預かりました、冒険者の藤宮 紅都と申します。この度はリア様との婚約をお伝えするためにここへ参りました次第でござります。ナナド様、第三王子様、以後お見知りおきを…」

昔、剣道の実家で習つた言葉遣いがこんな所で役に立つとは思わなかつたな。

最大限のアドリブで頑張る俺に、赤黒の服を着た男性が額きながら何かを言おうとするが、それをさえぎるように太つた男が椅子の上でふんぞり返りながら俺に話しかけてきた。

「お前がリアの婚約者か。リアは僕のものだ。即刻別れろ」

まるでそつする」とが当然、と言つた感じで太つた男が俺に命令してくる。

…一足歩行する豚にそんなことを言われるとは思わなかつた俺は少し苛立ちを覚えながら反論する。

「失礼ですが、貴方にそのようなことを言われる筋合いはありますやうなのだらう。ということはあつちのおじさんがナナドさんか。こんな国の王都など俺が『灼熱地獄の大炎柱』か『炎の世界』を使

フロミネンスヘルファイアレッドカーペット

ここまで自信満々に圧力をかけてくるところとせつが王子とやらなのだらう。ということはあつちのおじさんがナナドさんか。

『灼熱地獄の大炎柱』か『炎の世界』を使

『あんまり刺激しない方がいいわ。アンタに暗殺ギルドを向かわせたのもこの男よ』

『あんまり刺激しない方がいいわ。アンタに暗殺ギルドを向かわせたのもこの男よ』  
俺がまた反論しようと口を開きかけたとき、リアの口の形が『テレビティア』と小さく動いた。

リアに伝えられた情報に、俺は眉を潜めた。  
口の中で小さく『リ・テレパティア』と呟いてから思考発声を会話と同時に進行させる。

『貴方にそれが出来るんですか？』

あえて挑発するように言つてみる。いつすれば何か情報が引き出せるかもしないからだ。

たとえ怒らせて暗殺者が一万人来たとしても、今の能力に『神速神武』まで全開放すれば簡単に全滅させられる。物理的に。いやマジで。

予想通り、二足歩行する豚・王族豚は俺の態度に苛ついた様だ。変な顔になつている。

『リア、聞きたいことがある』

『そういうえば、ここに来る途中で暗殺ギルドの方たちに襲われてしまつたんですよね…。まあ、全員返り討ちにしましたが』

『何よ…！ つてか暗殺者みんな倒したの…？ まあ、『竜殺し』のアンタだつたら不思議はないけど…』

『…！ それがどうした？ 僕には関係ない』

王族豚は分かりやすくうろたえている。いつものまま魂喰で首を跳ね飛ばしてやろうかとも思つたがやめておく。国際指名手配犯と

イタ

かになつたら嫌だし、なつても国を滅ぼすだけだがリアの故郷が無くなつてしまつ。

まあ、リアには一応聞いてみるが、

「ねえ、この国滅ぼしていい？」

「あれ？ 貴方が私に刺客を差し向けたのでは？」

「…」「めんもう一回言つて」

「ち、違う！ 僕がそんなことするわけないだらうー。」

「だからこの国滅ぼしていい？」

「暗殺者たちに貴方の名前を聞いたのですがねえ」

「ダメに決まつてるでしょう！…！」

「なつ…！ お前いい「そこまで」」

俺の頭の中にリアの大声が響き、王族豚の声をその後ろに立つていた無表情な男が遮る。

俺はそこで無表情男が放つ雰囲気に始めて気付く。

(ここつ…、強いな…)

王族の護衛ボディガードならば当然かもしれないが、無表情男が言葉と共に一瞬

だけ放つたプレッシャーは只者ではなかつた。

それにどうやら、それは俺に放つたものではなく、

(あの豚に向けたプレッシャー…。実力もシグントに届くか…？)

俺はリアへと視線を向ける。横田で捉えたリアの姿は明らかに狼狽していた。無表情男のプレッシャーに当たられたのだらう。無表情男は俺の前に立つと口を開いた。

「テメ…、意外とやるみたいだな…」

「おい！ アドル！ 貴様何勝手に「黙れ」……く……！」

アドルと呼ばれた無表情男は一言で王族豚を黙らせると片頬を吊り上げ獰猛な笑みを浮かべた。

次の瞬間、

ガキイン！ 僕の魂喰イーターとアドルのトンファーがぶつかり合い、激しい火花を散らした。

そのまま、僕は眼前のトンファーをアドルイーターと切断してやろうと魂喰イーターに力を込めていく。すると、アドルはあっさりと引き下がった。魂喰イーターを受け流すと後ろへ飛び退った。

「…もういい。満足だ」

アドルが呟いた直後にはトンファーはアドルの手から姿を消していった。

王族豚の肩にアドルは手を置いて、

「オイ、女が欲しいんだろ？ ンなら俺に任せな」

自信満々なことを言つてからアドルは俺に挑戦的な視線を向ける。

「テメエ…冒険者なら武芸大会に出るよな？ この王子と戦えよ。んで負けたら女をよこせ」

「なに！？」

王族豚がアドルの言葉に目をまん丸に見開く

「つるせえぞイタリ。俺が代理で出る。  
「俺が勝つたらどうなるんだ？」

俺の返しにアドルは少し考え込んでから答えた。

「テメエの願いを何でもイタリが叶えてやる」

アドルには特に被害のない交換条件だった。

「落ち着いたか……？」

ナヴィスは大剣でルビアナの体を押さえつけながら己の妻に問い合わせる。  
それに対しルビアナはぶすっと頬を膨らませた。

「まあ、あなたが浮気をしていないのはわかつたけれど……、できればもつと早く言つて欲しかつたわ」

ルビアナのつぶやきにナヴィスは怪訝な顔をする。

「アーティストだ？」

たて

ルビアナはナヴィスから顔を背けるがナヴィスはそれを見逃さなかつた。

妻の顔を真正面からじっと見つめる。

フエンリルとはルビアナが創つた中でも特に狂暴で、絶対的な強さを誇る神獣である。

下界などに放つたらその日の内に世界が滅びかねない存在だ。

ナヴィイスは直後に念話を発動させ、イエスを呼び出す。

「イエス！ まだ助けは来ないのか！？」

『すでに送つていいが？』

「どこにいる！？」

『そんなことは知らん、自分で調べる。私も暇ではない、切るぞ』

「待てよ…」

ナヴィイスの必死の食い止めも虚しく、イエスは容赦なく念話を打ち切つた。

「くそ…！」

「あの、ナヴィイス？」

ルビアナが悪態をつくナヴィイスの顔色を伺うような口調で話しかけてきた。冷静に考えてみて初めて自分のしたことの重大さを理解したようだ。

「フェンリルはまだ完全には解き放たれていないとと思うのだけど…」「完全に？」

聞き返すナヴィイスにルビアナは頷く。

「『神狼 フェンリル』その力は強大だけど、いきなり現れでは自分ごと世界を粉々にしてしまう…。フェンリル自体の力が強すぎでね。フェンリルもそれは望まないから自分の力を世界に徐々に馴染ませていくはずよ」

「具体的にはどのくらいの時間でフェンリルは解き放たれるんだ？」

ナヴィイスの質問にルビアナはそうね…と考えて言った。

「最短でも……あと一年はかかるはず」

外伝 アーバニアの双神 2（後書き）

今回は短くてすいません汗

次の話もすぐに投稿しますへへ

「どーゆーことなのか説明してくれるよな？」

王族豚とアドルの出て行つた扉を睨みながら、俺は背後のリアとシグントに問いかけた。

リアの父親だといつナナドさんはアドルたちを見送りに言つて今はいない。つまり、ここでは婚約者のふりをしなくても良いことこのじだ。

己の武器、魂喰<sup>イタ</sup>に手をかけて、俺はゆっくつと振り返る。

「リア様は何もしていません。今回の事は私の一存」

後ろを見ると、シグントが深々と頭を下げながら謝罪の言葉を述べてきた。

下を向いたまま言葉を続ける。

「申し訳ございません。しかし、リア様があのイタリ様と婚姻を結びたくないと申しますので、実は『黒竜討伐』のクエストもイタリ様からのお誘いを断るために口実。ですが、ガラム洞窟で無類の強さを見せ付けた『一ト君を見たときに、君をリア様の婚約者として仕立て上げればイタリ様も諦めるのではないかと思つたのです』

シグントの今の説明を聞いて納得がいった。初めから、俺をリアの婚約者としてあの王族豚：イタリだつけるに引き合わせ、諦めさせるつもりだったのか。

道理であつたりとパーティへの一時加入を許したわけだ。

だが、俺がこの家に呼ばれたのは何らかのアクシデントがあつたからなのだろう。

「なんで俺を今日呼んだの？ 別にリアとはあした約束してたよな？」

「…そ、それは」

シグントが口を開くが、そんなシグントの前に進み出るリア。ほんの少し逡巡する素振りを見せ、口を開く。

「それは、イタリがアンタのことを知つて暗殺ギルドに依頼を出したからよ」

やつぱりか…、さつきのイタリの態度から薄々わかつてはいたが、本当にムカつくなあの豚。

そこで、俺の脳裏に一つの疑問がよぎつた。

「シグント…俺の情報どこまで漏らした？」

「…！… な、なぜそれを…！」

「簡単だよ、俺はイタリに会つたこともなかつたのに暗殺ギルドが俺を狙えるわけないだろう。つてことは、シグントが俺の名前と…少なくとも見た目を教えてることになるから」

名前と容姿の情報をえあれば俺の居場所くらい簡単に掴める。暗殺ギルドが聞き込みとかはあんま想像できないから情報屋みたいなのが諜報員がいるのだろう。

俺が思考の網を広げていく途中で、リアが俺に近寄つてくる。

『侍女が教えてくれたのよ。』王子女の付き人が暗殺ギルドの方に仕事を頼まつてましたよ…』つて…。この屋敷にはルーギス以外

の者が念話を使うと盗聴できるようになつて、付き人が外に出て行つたのがアンタのことを話した直後だつたから怪しいと思つてね」

そこで、リアは一度言葉を切つて少しすねたような表情を作り、「ひつたのだらつと俺が首をひねると、リアはひつ言つた。

「アンタが嫌なら、婚約者の話はなかつたことにしてもらひよ……」

「リア様？」

「でも私は……アンタと一緒に……」「リア」「

俺はリアの言葉を遮るようにその名を呼んだ。リアの顎に手を当つて、俺のまつを向かせる。

「そんな顔するな、いつも笑つてゐ。俺はリアの笑顔が好きなんだ。心配しなくてもやつてやるよ」

眼前のお姫様の顎に当つていた手を放し、洞窟では世話になつたからなと俺は肩頬を吊り上げた。

俺の視線とリアのそれが交錯する。どれほど視線を交し合つていた

だらうか、リアがはつとわれに返るとお決まりの台詞を口にする。

「べ、べつに嬉しくなんかないんだからー！」

相変わらずのシンデレラ発言のコアをシグントが軽く笑つて後ろから見ていた。

その後、俺は口裏を合わせるために軽く打ち合わせをしてから、大きな屋敷を出て『肉と野菜と料理』へ向かつた。

暗殺ギルドが襲つてくるのではないかと少し危惧したが、誰も居なかつた。先ほどの『暗殺者をことごとく倒していったのが良かつたのか、はたまたイタリがアドルに言われて依頼を取り下げたか。

どちらにしろ、暗殺者が来ないのならそれに越したことはない。俺は用心のために外していたブルータスを指につけ、石畳の上を進んでいく。

リアから、明日は休んでいいと言わされたのでリーナの所に武器を取りに行くまで暇である。

さて何をしようか…と考え事をしながら歩く俺は、そういうえばと冒険者ギルドに所属したことを思い出した。金を稼ぐことも含めて戦闘に慣れておくのは悪いことではないだらう。

今までに戦闘を経験したモンスター この世界では魔物と呼ぶらしい が竜種だけってのもどうかと思う。

俺は「思い立つたが吉田」という昔の人の言葉に習い、ぴたりと『肉と野菜と料理』に向かつていた足を止め、冒険者ギルドへと方向転換させる。

二十分後。

「どれがいつかなー」

俺はギルドへの依頼が張られている掲示板の前で首を捻っている。先ほど受け付けのお姉さん、ルエラさんにクエスト受諾の説明を受けてここにやって来た。

スキルカードに新たに刻まれていた称号『Eランク冒険者』という名の通り、現在俺はEランクの『冒険者』。

ちなみにランクはE→Sまでの六段階。一定以上の成果を上げると自動的に称号が上がっていくらしい。

受けられるクエストは一度に一つ、ロランクのクエストまでなら問題なく受けられるが、Cランクからは契約金という形でお金が必要になるらしい。クエストが成功した場合はそのままの金額が報酬と一緒に帰つてくるが、失敗すれば戻つてこない。

今俺が目をつけているのは三つの討伐系クエストだ。

### 血狼討伐

依頼内容、グランキャッスル周辺の森に生息するブラッドウルフ一十四の討伐。

討伐証明、ブラッドウルフの牙四十個、もしくは頭部を二十個どちらかをまとめて。

クエスト難易度 D  
報酬、大銀貨九枚。

### 怪鳥討伐

依頼内容、グランキャッスルから西へ半日ほど進んだ場所に巣を作った怪鳥ミドルノアの討伐。

討伐証明、ミドルノアの虹色角一個。

クエスト難易度 C  
報酬、小金貨一枚。

## 炎猫討伐

依頼内容、グラソニヤツスルのレストラン『ボルーグ』内に住み着いたフレイムキャットの討伐。

討伐証明、フレイムキャットの炎尾一本。

クエスト難易度 D

報酬、大銀貨七枚。

「うーん…」

俺は首をかしげた。

どれを受ければいいのかがわからない。

大体、クエストの難易度が一つ上がつただけで報酬が倍以上に増えているのはどうしたことだろ。そんなに難しいのかな？

そんなことを考えながら俺は一度、C、Dランク推奨の下位掲示板から離れる。

それから、階段を上つて、A、Bランク推奨の上位掲示板を見に行つた。

すると、ラフな出で立ちをしたリーナに出会つた。

「あれ？ リーナさん？」

「！ ロート君！」

「なにやつてるんですか？」

「ちょっと依頼を…」

リーナは照れたように頭をかく。

依頼つて何をだろ？ と俺が質問をするために口を開きかけると、

「お待たせしました！」

元気な声が一階に響いた。

リーナと共に階段のほうに目を向けると、ツインテールをぴょこつと揺らす女の子がいた。

誰だ？ と俺は女の子を見るとその子の服に何か引っかかる。茶色の下地を黄色で彩った、ブレザーのような制服を身に纏ついた。それは以前、受付の時にお姉さんが着ていたものに良く似ている。

「エイドさん。クエストの発注書を確認してもらえますか？」

「どうやらギルドの職員らしい。エイドといつのはリーナの苗字だろう。俺はリーナが手渡された紙を横から覗き込む。

### 精霊結晶採取

依頼内容、リバン火山での『炎の精霊結晶』の採取。

依頼対象、『炎の精霊結晶』。大きさは中くらいのもの一つ、もしくは大きなものを一つ。

クエスト難易度、A

報酬、大金貨三枚。

「大金貨三枚！？」

俺は報酬の多さに目を丸くした。二百万円だ。

そして迷わず右手を上げる。

「それ俺が受けます！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4763v/>

---

最強の剣士～紅の都を創る者～

2011年10月8日11時36分発行